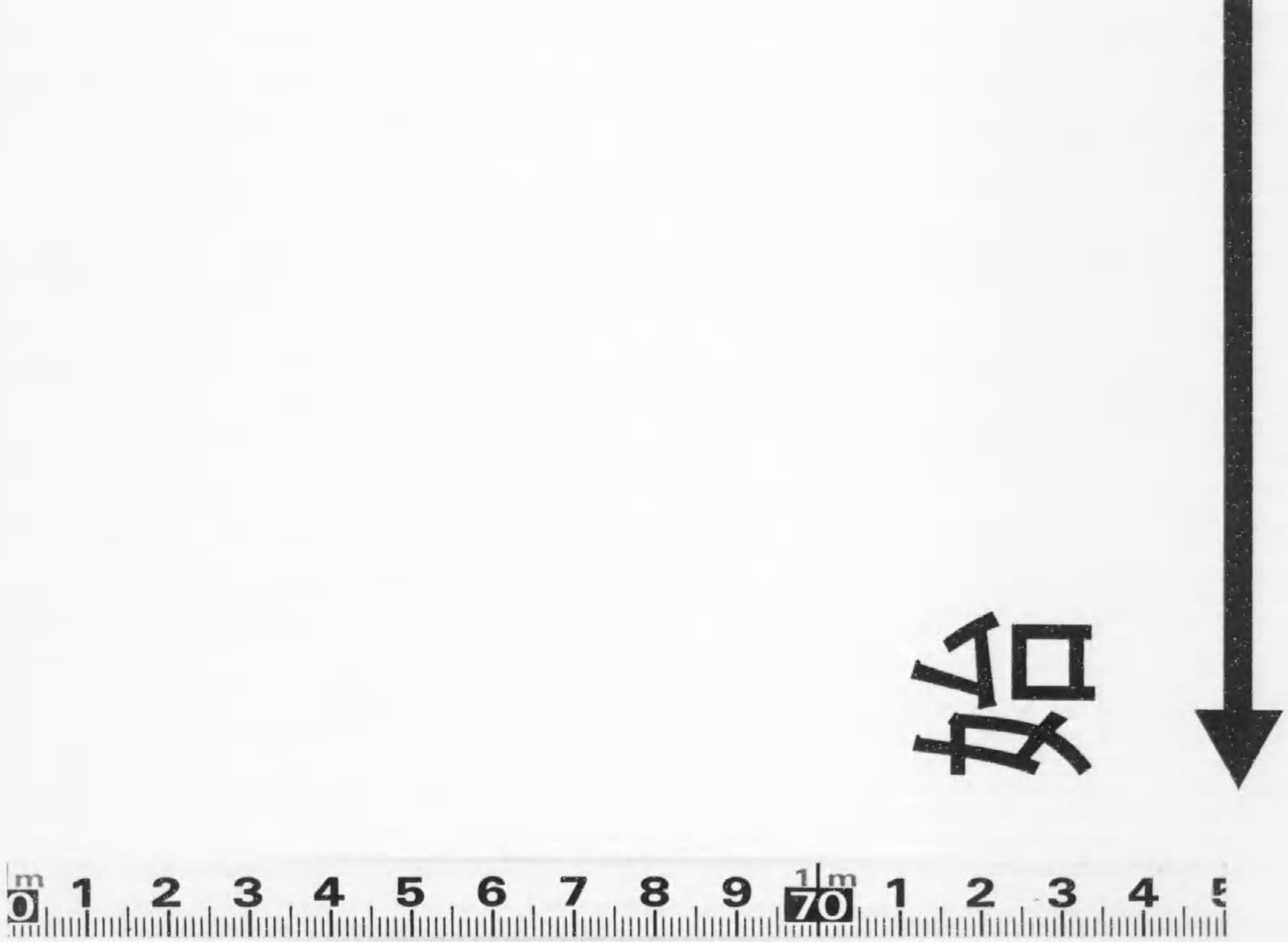

529
202

7-4062
b

トンキデェヴ・クンラフ

めざ日の春

少年悲劇

野上豊一郎
譯翻

岩波書店
行刊

大正
13. 11 5
内交

フランク・ヴェデキント

翻譯著作權所有
無斷上演ヲ禁ズ

76
18
54

529-202

はしがき

一「春の目ざめ」、Frühlings Erwachen、は、フランク・ヴェデキント Frank Wedekind（一八六四年―一九一八年）に依つて一八九〇年に發表された少年悲劇で、劇中の一人物なる假面の人に獻本されてある。ドイツに於ける最初の上演は一九〇六年で、演出者はマクス・ラインハルトであつた。それまでイブセン劇の役者として多少の經驗を持つてゐた作者自身も最後の場面に假面の人として登場した。

一「春の目ざめ」の日本語譯を私が初め本にして出したのは大正三年（一九一四年）で、それから數年の後牛込の藝術座の舞臺で踏路社同人に依つて試演として三日間上演せられたことがあつた。

一「春の目ざめ」の翻譯著作權竝びに上演權については、私は譯本を出す前の年に、當時

ミュンヘンにゐたヴェデキントに手紙で交渉して、それを與へられた。併し私の初めの翻譯は彼の厚意に酬いるに十分なものとは思へなくなつて來た。私はそれを廢棄して新しく作り直さうと考へた。それから暇暇に手を入れたりもしてゐた。終に昨年の夏日光湯元滯在中にこれを仕上げた。私にとつては、それは古く振り出した手形の始末をつけるやうな義務觀念が強く働いてゐたことを白狀する。

一「春の目ざめ」が何を說かうとしたものであるかは、「春の目ざめ」そのものが最もよく語つてゐる。勿論私の最初の翻譯の動機は、原作者と共に世の親たちに向つて、また敎育者たちに向つて、子供の成熟の可能を考へて、これに光と善い導を與へるやうにしたいと思ふ相談の心からであつたことは云ふまでもないが、更に、私はそれだけでなく、此の作品は一箇のすぐれた藝術品として取扱はれるべき資格を十分に持つてゐることをも信じてゐる。

一「春の目ざめ」の作者が特に私に贈つてくれた寫眞二葉のうち一葉を卷頭に挿入し、また表紙に彼自身の書いた標題を私へ宛てた手紙の中から寫して出すことにした。これ等も今では私にとつては記念となつたものである。

一「春の目ざめ」の原文の解釋について示敎を惜まなかつた友人小宮豐隆、內田榮造及び關口存男三君の厚意に對して私は感謝を表明しなければならぬ。

大正十三年七月

野上豐一郎

春の目ざめ

第一幕

第一場

居間

ヴェンドラ　どうして着物をこんなに長くなすつたの、お母様？

ベルクマン夫人　あなたは今日からもう十四ですよ！

ヴェンドラ

こんなに長くするのなら、私十四になんかなるんぢやなかつたわ。

ベルクマン夫人

ちつとも長かありませんよ、ヴェンドラや。まあ、一體どうすればよいといふの！　毎年毎年二寸づつも大きくなつて行くのだもの、しようがないぢやありませんか。こんな大きな娘の子がいつまでお人形さんの着物を着てゐられますか。

ヴェンドラ

でも、お人形さんの着物の方がこんな寢捲みたいなだらだらしたものよりかよつぽど私には似合つてよ。――もう一ぺん着さして頂戴な、ねえ、お母様！この夏だけでも。十四になつたつて十五になつたつて、着る時になれば私こんな懺悔服だつておとなしく着ますわ。――この次のお誕生日までしまつて置きませうよ。今着たつて裾縁（べり）を踏みつけるだけですもの。

ベルクマン夫人

困つてしまふね。私だつて、あなたがいつまでも今のやうであつておくれだといいのだけれども。どこの娘も皆んなあなたの年頃になると不恰好な丸たんぼうみたいになつてしまふのに、あなただけはまるつきり別なんだもの。――この調子で行つたらどうなるでせうね、皆んなの大きくなつた時分には。

ヴェンドラ

どうなるでせうね――きつと死んでしまつててよ。

ベルクマン夫人

まあ、なんだつてそんな事を考へるの！

ヴェンドラ

ね、お母様。ね、氣にしないで頂戴！

ベルクマン夫人

（ヴェンドラに接吻しながら）

あゝ、大事ないい子だもの！

ヴェンドラ

よくそんなことを私考へてよ、寝られない晩には。でも、ちつとも悲しくなんかならないわ。却つてよく寝つかれるのですもの。――いけなくつて、お母様、そんなことを考へたりするのは？

ベルクマン夫人

ぢやその懺悔服は戸棚へ掛けていらつしやい！　仕方がないからまたお人形さんの方にしませう！　――その内もう一幅だけでも裾飾（ヴォラン）を附け足して上げませう。

ヴェンドラ

（着物を戸棚に掛けながら）

いやだ、それならいつそ二十（はたち）になつた方がましだわ……！

ベルクマン夫人

――その着物だつて初はたつぷりしてゐたのに……

ヴェンドラ

でも風を引かなけりやいゝがね！　――お母様、いくら子供だつて、膝がだつて、もう夏ぢやありませんか？　――いいわ見てゐらつてよ！　そんなに心配なさらなくたつてデフテリアにかかることなんかなくつて大丈夫。私の年頃で寒いといふやうなことないわ――それも足なんぞが。それとも私熱い目を見た方がいいとおつしやるの、お母様？　――いいわ見てゐらつしやい、今に大事ないい子が朝になつたら袖を引きちぎつて、夕方になつたら靴も靴下も穿かないでお母様の所へ行つて上げるから！　――それから懺悔服を着る時には、お伽話の女王様みたいにその下にいろいろ着飾つてよ。……

叱つちやいやよ、ね、かあさん！　だつて誰にも見られはしないんだもの。

第二場

日曜日の夕方

メルヒオル　いやになつちやつた。もうよさう。

オットー　ぢや僕等もよすよ。――君、宿題はやつたの、メルヒオル？

メルヒオル　君たちは遊んでゐたまへな！

モリッツ　何處へ行くんだい？

メルヒオル　散歩さ。

ゲオルク　今に暗くなるぜ！

ロベルト　君はもう宿題はやつたの？

メルヒオル　暗くなつたつて散歩されないわけはないぢやないか？

エルンシュト

中央アメリカ！　――ルドヴィッヒ十五世！　――ホメル六十行！　――方程式七題！

メルヒオル　宿題がなんだい！

ゲオルク　ラテンの作文だけでも明日でないといいんだがな！

モリッツ　何か考へようとしたつて、宿題が邪魔になつて考へられはしない！

オットー　僕は歸るぜ。

ゲオルク　僕も歸らう。宿題をやるんだ。

エルンシュト　僕も歸らう。

ロベルト　さよなら、メルヒオル。

メルヒオル　失敬！

（皆行つてしまつて、モリッツとメルヒオルだけ殘る。）

メルヒオル　我我は一體何の爲に生きてるんだかわからないね！

モリッツ　學校のことを思ふと僕はドッシュケ（馬車）の駄馬にでもなつた方がよかつたやうな氣がする！　――何のために學校へ行くんだ？　――試驗をされにだ？

――何のために試驗をされるんだ？　――落つこちるためさ。――七人はきつと落つこちるよ。なぜといつて、上の教室は六十人きりはいれないんだもの。基督降誕祭（ワイナヘト）から此方僕は變な氣持になつてしまつた。……畜生、親爺さへなかつたら今日にでも行李を縛つてアルトナ*へ行つてしまふんだがな！

メルヒオル　なにか外の話をしよう。

（二人は歩きまはる）

モリッツ　君あそこに黑猫が尻つ尾を押つ立ててるぜ。

メルヒオル　君は前兆といふものを信じるか？

モリッツ

どうだかな。――――あいつきつと其處いらの猫だぜ。なんでもない。

メルヒオル　僕の考では前兆は一つのカリブヂス*で、宗教の迷信といふスキラ*から遁れ出ると、その中に皆んな捲き込まれてしまふのだ。――此の山毛欅（ぶな）の木の下に坐らうぢやないか。いい風が山の上から吹いて來る。僕はなんだか自分が若いドリアデ*でもあつて、森の中の高い所にゐて、長い夜（よる）を一夜（よ）ぢう一等高い木の梢（こずえ）で搖られてゐたいやうな氣持がするよ。……

モリッツ　ちよつきのボタンをはづし給へな、メルヒオル！

メルヒオル　やあ――こんなに着物がふくらんだ！

モリッツ

いつの間にかすつかり暗くなつてしまつて、自分の手もなんにも見えやしない。君、一體どこにゐるのさ？　――君も斯うは思はないかい、メルヒオル、人間が羞かしがるといふのは教育の一つの結果だとは？

メルヒオル

そのことなら僕もちやうど一昨日考へて見たんだ。僕にはそれは人間の本性に深く根ざしたもののやうに思はれるのだ。假に君が友だちの前ですつぱだかにならなけりやならないとして見たまへ。向でならなかつたら君だつてなりはしないだらう。――それでなんだか流行みたいな所があるね。

モリッツ

僕はこんなことも考へたよ。若し僕に子供があつたら、男の子や女の子があつたら、僕は早くから皆んな同じ部屋に入れて、出來るならひとつ寢床で一所に寢かして、朝晩着物を着たり脱いたりするのもお互同士手傳はして、それか

ら暑い時分になつたら、男の子も女の子も、いちにち、革帶のついた白い毛織の短かいッニカよりほか何んにも着せないのだ。――そんな風にして大きくなつたら、あとでは今の僕等よりもずつと平氣になれるだらうと思ふのさ。

メルヒオル

それは確かにさうだよ、モリッツ！　――問題はただ、若しか女の子にこどもができたらどうするか？　だ。

モリッツ

どうしてこどもはできたりするんだらう？

メルヒオル

僕はそれについては或る種の本能を信じてゐる。今例へば一匹の牡猫を子供の時から一匹の牝猫と一所に締め込んで置いて、どつちも外界の交通から遠ざけてしまつても、即ち、彼等だけの好きな通りにさせて置いても――遲かれ早

かれ牝猫の方がきつとはらんでくるだらう。もちろん牝猫だつて牡猫だつて誰も見習ふやうな例を示してやるものはないとしてもさ。

モリッツ　動物は見習はなくとも、結局ひとりでにさうなるんだよ。

メルヒオル　人間だつてさうだと僕は思ふよ！　ねえ、モリッツ、若し君の男の子が君の女の子とひとつねどこでねてゐたら、いつの間にかきつと最初の男性的發情が起つて來るだらうぢやないか。――僕は誰とだつて賭をしてもいい。……

モリッツ　そりやさうかも知れない。――併しそれでも……

メルヒオル　それからまた君の女の子だつて同じ年頃になつたらやつぱしさうだぜ！　女

の子の方はすつかり同じとは云へないかも知れないが……あまりはつきりしたことは云へないけれども……先づさうなるだらうと思ふね。……それには好奇心といふものも手傳はない筈はないからね！

モリッツ　一つ聞きたいことがあるんだがね――

メルヒオル　なんだい？

モリッツ　でも云つてくれる？

メルヒオル　もちろん！

モリッツ

きつとね?!

メルヒオル

大丈夫、この手にかけて。――――なんだい、モリッツ?

モリッツ

君もう作文は書いたかい??

メルヒオル

なあんだ、はつきり云ひ給へよ!――聞いてる者も見てる者もありはしないぢやないか。

モリッツ

云ふまでもなく僕の子供たちは一日庭へ出して勉強をさしたり、遊ばせて身體を丈夫にさしたりするんだ。馬にも乘せるし、體操もさせるし、木登りもさせてやる。が、何より大事なことは夜僕等みたいに眠れないやうなことにしてはならないと思ふね。僕等は實際ひどく眠れないんだからね。――僕の考では、よく眠れたら決して夢なんか見るものぢやないと思ふんだ。

メルヒオル

僕はこれから葡萄の取入れのすむ頃まで、ずつと通して僕の吊床（ハンモック）でばかし寢るんだ。もう寢臺は暖爐の後の方に片附けてしまつちやつた。疊めるやうになつてるやつだよ。――去年の冬僕は内のロロ（犬）をひどくぶん毆つて足が利かないやうにしてやつた夢を見たことがあつた。僕のこれまで見た夢のうちで一等いやな夢だつた。――なんだつてそんなに人の顔ばかし見てるんだい?

モリッツ

君はもうあれを經驗したかい?

メルヒオル

何を？

モリッツ

何とか云つたつけね？

メルヒオル

男性的發情？

モリッツ

う――む。

メルヒオル

――あゝ、經驗したとも！

モリッツ

僕もだよ。――――――――――――――――

――――――――――――――――――

メルヒオル

僕は疾(と)つくから知つてるんだ！――もう一年にもなるよ。

モリッツ

僕は雷電(かみなり)に打たれたやうだつた。

メルヒオル

君、夢を見たかい？

モリッツ

ちよつときり：……空色(そら)の股引(トリコ)をはいた足が、教壇へ上つて行くところを。――はつきり云ふと、教壇を跨ぎ越さうとしてゐたんだらうと思ふんだ。――そいつをちらつと見たきりだ。

メルヒオル

ゲオルク・チルシュニッツはお母さんの夢を見たつてね。

モリッツ

ゲオルクが君に話したのかい？

メルヒオル

町はづれの獄門道（ガルゲンシテヒ）で！

モリッツ

君にはとてもわかるまいが、僕はその晩からどんなに苦しい思ひをしてゐるか知れないんだ！

メルヒオル

良心の苛責か？

モリッツ

良心の苛責？？ ――――――死の恐怖だ！

メルヒオル

さうかい……

モリッツ

僕はもうどうすることも出來ないときめてしまつたんだ。何か内部に深い痛手でもあつて惱んでゐるんだと思つたんだ。――それで結局僕は自分の感想を書き出して、やつと落ちついては來たんだがね。ほんたうに、ねえメルヒオル、この三週間といふものは僕にとつて一つのゲッセマネ*だつたよ。

メルヒオル

僕の時はもうあの事はいくらか知つてゐたんだ。少し羞かしい思ひはしたがね。――でも、それだけですんだ。

モリッツ

そのくせ君の方が僕よりまる一つ年下だのに！

メルヒオル

そんなことは、モリッツ、僕は問題にしたくはないね。僕のすべての經驗に依ると、さういつた妄想の最初の現はれには一定の年齢といふものはないやうだ。君はあの藁のやうな黄いろい髪毛と鷲鼻をしたでつかいレンメルマイエルを知つてるね？　三つも僕より年上だぜ。でもヘンスヘン・リロフの話に依ると、今でも砂饅頭（ザンドトリチ）や杏子ゼリ（アプリコーゼン）の夢ばかし見てゐるさうだよ。

モリッツ　でも、どうしてヘンスヘン・リロフにそんなことがわかつたのだらう！

メルヒオル　自分で聞いたんだつて。

モリッツ　自分で聞いたんだつて？　――僕なんかにやとても人に聞けつこないね。

メルヒオル

君だつて僕に聞いたぢやないか。

モリッツ　さうだつたね！　――若しかするとヘンスヘンももう遺言書を書いてあるかも知れないぜ。――實際ひとをばかにしてるよ、世間は。さうして置いて僕等に感謝させようとするんだものね！　どう考へて見ても僕はこんな種類の動搖を求めた覺えはない。なぜ僕は靜かに寢かして置いて貰へないのだらう、何もかももう一度落ちついて來るまで。僕の兩親に百人子供があるとしても僕みたいな厄ざものは二人と出來つこはあるまい。とにかく僕は、どうして來たのだかわからない。が、此の世に生れて來てる以上は、斯うして生きてゐることに對して責任があるやうにも思ふのだ。――君はまだ考へて見たことはないか、メルヒオル、どういふ方法でもつて我々は一體こんな渦卷の中に捲き込まれて來たのだらうかといふことを？

メルヒオル　君はそんなことがまだわからないのかい、モリッツ？

モリッツ　わかる筈がないぢやないかね？　――僕だつて牝鷄が卵を産むのは見たことも、それからお母さんが僕を胸の下に入れてゐたといふことも聞いたことはあるさ。でもそれだけで十分だらうか？　――今思ひ出すと、五つの時のことだが、僕はあのデコルテのクュルダム（パートの女王）の札を誰かがめくると、本統にこまつてしまつたことがあつた。そんな感情はもうなくなつてゐるが、併し今でも女の子と話をすると何か知らいやあなことを思ひ出さないことはないよ。さうして――正直に云ふとね、メルヒオル――それが何だか僕にもわからないんだ。

メルヒオル　僕がみんな話してあげよう。――僕は一部分は書物から、一部分は挿畫から、一部分は實物の觀察からわかつたのだ。君おどろくだらう。僕もその頃は無神主義者（アナキスト）になつたね。僕はゲオルク・チルシュニッツに話してやつたんだ！　ゲオルク・チルシュニッツはヘンスヘン・リロフに話してやらうとしたのさ。するとヘンスヘン・リロフはもう子供の時に家庭教師の女に聞いてすつかり知つてゐたんだよ。

モリッツ　僕は小マイエル（百科辭典）を（アー）から3（ツエット）まで調べて見た。名前だけさ――名前が並んでゐるだけで、外になんにもありはしない！　簡單な說明一つだつてありはしないのだ。ああ此の羞かしい思さへなかつたら！　――いくら百科辭典だつて、最も切實な人生問題に答へてくれないやうなものが何になるか。

メルヒオル

君はいつか二匹の犬が往來でつがつてるのを見たことがあるかい？

モリッツ

ないよ！　――　――今日はもう話すのはよしてくれたまへ、メルヒオル。僕はまだ中央アメリカとルドヴィッヒ十五世があるのだ。それにホメルが六十行と方程式が七題とラテンの作文――明日はまた間違だらけかな。試驗勉強をうまくやつてのけるには、牡牛のやうに粘りこくなくちゃだめだね。

メルヒオル

僕の部屋へ來たまへ。四十五分もあつたら僕はホメルと方程式と作文二つは出來るよ。君のにはちよつとした誤を一つ二つ入れて置かう。さうしたら大丈夫だ。母樣が僕等にまたリモナデをこさへてくれるぜ。それで僕等は愉快に繁殖論でもやらうぢやないか。

モリッツ

だめだ。――僕には繁殖論なんか愉快にやらうたつて、とてもだめだ！　親切があるなら君の敎へてくれようと思ふことを書いてくれ給へ。君の知つてることを皆んな書いてくれ給へ。成るたけ簡單明瞭に書いてくれ給へ。さうして明日體操の時間に、僕の書物の間に挿んで置いてくれ給へ。僕は自分でそれを持つてゐることを知らないで內へ持つて歸るのだ。それが思ひがけもなく出て來るんだ。目が疲れてゐたつて讀み通さないではゐられないだらう。……どうしても必要な場合には、圖を入れて置いてくれ給へな。

メルヒオル

まるで女の子みたいだね。――まあ君の云ふ通りにして上げよう！　僕には全く興味のある仕事なんだから。――　――序に聞くがね、モリッツ。

モリッツ

うん？

メルヒオル
——君なんなの子を見たことがあるだらう？

モリッツ
あるよ！

メルヒオル
でも全部だぜ?!

モリッツ
すつかりさ！

メルヒオル
僕もあるんだ！　——ぢや挿畫は入らないや。

モリッツ
射的會の時、ライリッヒの解剖展覽會で見たんだ！　知れたら學校を出され

たかも知れなかつた。——明るい畫のやうに美しくて、さうして——まるで、そつくりさ！

メルヒオル
僕は去年の夏、母樣とフランクフルトへ行つてた時——　——もう歸るのかい、モリッツ？

モリッツ
宿題をやるんだ。——さよなら。

メルヒオル
おやまた。

第三場

テアとヴェンドラとマルタが腕を組み合せて往來を歩いて來る。

マルタ　まああなたの靴は水がいつぱいだわね！

ヴェンドラ　まああなたの頰は風があたつてるわね！

テア　まああなたの胸はどきどきしてるわね！

ヴェンドラ　橋の所まで行つて見ませうよ！　イルゼが云つたわ、川は流れ木や材木でも

つて一ぱいになつてるつて。男の子が筏を浮かしてるつて。メルヒ・ガボルは昨日の夕方もう少しで溺れるところだつたつて。

テア　さう、あの人游げるのね！

マルタ　あたりまへだわ、あなた！

ヴェンドラ　游げなかつたら、溺れてしまつたらうぢやありませんか！

テア　あなたの髪こわれててよ、マルタ、あなたの髪こわれててよ！

マルタ　いゝわ——こわれたつてかまはないわ！　朝から晩まで世話のやける髪です

もの。私はあなたみたいに短かくしてもゐられなけりや、ヴェンドラみたいにお下げにもしてゐられないし、小馬の髪（前を垂らして刈り込んだ髪）にもしてゐられないのよ。内へ帰ると縮らしたりなんかばかりしてゐなくちやならないんだもの。――叔母さんがそりやかましいんだから！

ヴェンドラ　明日宗教の時間に私鋏を持つて行くわ。さうしてあなたが「迷はざる者は幸ひなり」*なんて暗誦してる時、剪つてあげてよ。

マルタ　後生だからよして、ヴェンドラ！　またお父様にひどく打たれたり、お母様に三晩も石炭穴に押込められたりするわよ。

ヴェンドラ　何で打たれるの、マルタ？

マルタ　それもしよつちうなのよ、私みたいなろくでなしのお轉婆がゐなくちや、何だか張合がないとでもいつた風に。

テア　ひどいのね！

マルタ　あなた襦袢の襟に空色のリボンを附けてもいいとは云はれないこと？

テア　淡紅色の繻子よ！　お母様は淡紅色が私の瀝青みたいに黑い目にはよくうつるつて、さう云つてよ。

マルタ　私には青がばかに似合つてよ！　――でもお母様は私の髪をつかんで寢臺から

引きずり出したの。だもんだから——私床の上に逆さに落つこちてしまつたわ。——だつて母様は毎晩私たちと一所にお祈をするから、見つかつてしまつたのよ。……

ヴェンドラ　私だつたらとつくに家を飛び出してやるわ。

マルタ　……それ御覽、お前さんはさういふ量見なんだ！　——それ御覽！　——だから云はないことぢやない——だから云はないことぢやないといふのさ！——母さんは後になつてお前さんにとやかく云はれたくないからね……

テア　おや——！おや——

マルタ

あなたにはわかつて、テア、母様はどんな意味で云つたんだか？

テア　わからないわ。——あなたは、ヴェンドラ？

ヴェンドラ　私ならいきなり母様に聞いて見るわ。

マルタ　私地びたへ寢ころんで大聲立てて泣いちやつたの。すると父様が來た。びり——それから襦袢を脱がされちやつた。私戸口から駈け出しちやつたわ。それ御覽！　お前さんはそんな風で往來へ飛び出して行かうといふつもりなんらう。……

ヴェンドラ　そんなことうそでせう、マルタ。

マルタ　私凍えちやつたわ。私何もかも云つちやつたわ。その晩は夜通し袋の中へ入れられて寝かされてしまつたのよ。

テア　袋の中なんかでよく寝られるわね！

ヴェンドラ　私いつか代つて上げてもいいわ。

マルタ　打たれさへしなけりやね。

テア　でも窒息するでせう！

マルタ

頭は出しとくのよ。頤の下で締めるんだから。

テア　さうして置いて打つの？

マルタ　さうぢやないの。打たれるのは何かあつた時だけよ。

ヴェンドラ　何で打たれるの、マルタ？

マルタ　ええ——何でも手あたり次第の物よ。——ちよいと、あなた、寝床でパンを食べたりするのはお母様にお行儀がわるいとは云はれないこと？

ヴェンドラ　云はれないわ。

マルタ　私いつも思つてよ、そんなこと云ひながら自分たちでは好きなことをしてるんぢやないか知らつて――尤も默つてはゐるけれども。私に子供ができたら、家の花園の草みたいに氣ままに成長さしてやるわ。ちよつとも構つてやらなくたつてずんずん伸びて茂つて行くんですもの。――だけれど花壇の薔薇は棒にしばられて一夏ごとに花が小さくなつて行くぢやないの。

テア　私に子供ができたら、淡紅色の着物ばかし着せてやるわ。淡紅色の帽子に、淡紅色の着物に、淡紅色の靴。ただ靴下だけは――靴下だけは夜のやうな黑い色よ！　――それから散歩する時は皆んな私の前を歩かせるの。――あなたは、どう、ヴェンドラ？

ヴェンドラ

だつてできるつてことがどうしてわかつて？

テア　できない筈はないでせう？

マルタ　叔母オフイエミアにはさう云へばできないわ。

テア　ばかなひと！　――あの人結婚してゐないのですもの。

ヴェンドラ　叔母バウエルは三度も結婚したけれども、ひとりもできなくつてよ。

マルタ　――でもできるとしたら、ヴェンドラ、あなたどつちが欲しい、男の子、女の子？

ヴェンドラ　そりや男の子だわ！　そりや男の子だわ！

テア　私も男の子よ！

マルタ　私もよ！　女の子が三人出來るよりか男の子なら二十人出來たつていいわ。

テア　女の子はいやね！

マルタ　私まだ生れない前だつたら、女の子になるくらゐなら、いつそ生れない方がいいわ。

ヴェンドラ

それは併し趣味の問題だわ、マルタ！　私は女に生れたのを毎日喜んでゐるのよ。本統に王子にすると云はれたつていやだわ。――男の子ができるといいといふのも、つまりそれだからなのよ！

テア　そんなをかしな話ないわよ、ヴェンドラ、本統にをかしな話！

ヴェンドラ　だつてさうぢやなくつて、あなた、男に愛される方が、女の子に愛されるより千倍もいいとは思はない！

テア　でもあなた山林官のプフェレがメリッタを愛するのは、メリッタがプフェレを愛するより以上だと主張することは出來ないでせう！

ヴェンドラ

出來ますとも、テア！　――ブフェレの方は得意なのよ。ブフェレは山林官だもんだから得意なのよ。――だつてブフェレは外になんにも持つてゐないのだもの。だけどもメリッタの方は幸福なのよ。自分より一萬倍も以上のものを持つてゐるのだから。

マルタ

あなただつて御自分で得意なのぢやありませんか、ヴェンドラ？

ヴェンドラ

まあばかなこと。

マルタ

私だつたら得意になつてよ。

テア

ちよいと御覽なさいな、あの歩きぶりを――あの眞つ直な目つきを――あの

からだつきを、ねえマルタ！　――あれで得意でないんでせうか！

ヴェンドラ

得意になつたつてしやうがないぢやないの?!　私は女に生れたから幸福なのよ。女に生れなかつたら私自殺しても、此の次には……

メルヒオル

（通り過ぎて挨拶する）

テア

あの人ほんとうに頭がいいのよ。

マルタ

私なんだか若いアレクサンデルがアリストテレスの學校へ通つてゐたといふ話を思ひ出してよ。

テア

いやになつちまふわ、ギリシア史は！　――私なんぞソクラテス*が桶の中に寝てゐるとアレクサンデルが驢馬の影を賣りつけたといふ話きり知らないわ。

ヴェンドラ

あの人はクラスで三番だつてね。

テア

教授（プロフェッソル）クノッヘンブルフがおつしやつてよ、あの人は首席（プリムス）にだつてならうと思へばなれるのだつて。

マルタ

きれいな額をしてゐるわ。でもあの人のお友だちの方が深刻な目をしててよ。

テア

モリッツ・シュチーフェル？　――寝帽（シュラーフミュッツェ）（ぼんやりさん）だわ！

マルタ

私あの人といつも仲よくしてるのよ。

テア

あの人は何處で逢つても人を馬鹿にしてよ。リロフのうちで子供舞踏會のあつた時、私にプラリネ（チョコレート）を差し出すのよ。それが、どうでせう、ヴェンドラ、軟かくて暖かいぢやないの。あら、これは……？　さういふと、あの人の云ひぐさがいいぢゃないの。それは長いことズボンのかくしに入れといたんだつてさ。

ヴェンドラ

ねえ、メルヒ・ガボルがその時私に斯う云つてよ。僕は何んにも信じないんだ。――神も信じなけりや、來世も信じなけりや――現世の何物をも信じないんだつて。

第四場

高等普通學校（ギムナジウム）の前の遊園地。――メルヒオル、オットー、ゲオルク、ロベルト、ヘンスヘン・リロフ、レンメルマイエル

メルヒオル　誰か知らないかい、モリッツ・シュチーフェルは何處にゐるんだか？

ゲオルク　あいつひどい目に逢ふよ！――きつとひどい目に逢ふよ！

オットー　よせばいいのに、あいつきつとつかまるから！

レンメルマイエル　いやになつちまふ、今度は身代りは御免だぜ！

ロベルト　づうづうしいや！――ばかにしてやがる！

メルヒオル　ど――ど――どうしたつておい？

ゲオルク　どうしたつて？――云つて上げようか……

レンメルマイエル　僕は默つてゐりやよかつた！

オットー　僕もさうだ――默つてゐるんだつたな！

メルヒオル

すぐに云はないと……

ロベルト　つまり斯ういふんだよ、モリッツ・シュチーフェルは會議室に忍び込んだんだ。

メルヒオル　會議室に……？

オットー　會議室に！　――ラテンの時間がすむと直ぐ。

ゲオルク　あいつ一番後から出たんだ。わざと後になつたんだね。

レンメルマイエル　僕が廊下の角を廻る時に見たら、戸をあけてゐたよ。

メルヒオル　君はさらつて行かれろ……！

レンメルマイエル　惡魔は奴をさらつて行くだらうさ！

ゲオルク　きつと校長が鍵を拔き忘れて置いたんだね。

ロベルト　それともモリッツ・シュチーフェルが合鍵を持つてゐたかな。

オットー　やつのことだからね。

レンメルマイエル　うまく行つて呼出だぜ。

ロベルト　通知簿の備考欄に書き込まれるぜ。

オットー　さうでなくてもこんな成績ではおつぼり出されるところなんだからね。

ヘンスヘン・リロフ　あそこへ來たぞ！

メルヒオル　手巾（ハンカチフ）みたいに眞つ靑（さを）だ。

（モリッツが非常に興奮して來る。）

レンメルマイエル　モリッツ、モリッツ、君大變なことをやつちやつたね！

モリッツ　——何んにもやりやしない——

——何んにもやりやしないよ——

——

ロベルト　いやに興奮してるね！

モリッツ　——愉快だからさ——幸福だからさ——嬉しくてたまらないからさ——

オットー　君つかまつたんだらう?!

モリッツ　あがつたんだよ！　——メルヒオル、僕あがつたんだよ！　——もう世界が滅びたつていい！　——僕あがつたんだよ！　——僕が上らうとは誰も思はなかつただらう！　——まだ自分だつて本統のやうな氣持がしないもの！　——

僕は二十度も讀んで見た！　――それでも信じられない――ありがたいことには、在つたよ！　――在つたよ君！　僕は上つたんだよ！　――（微笑して）わからない――僕にも不思議だ――大地が廻り出した……メルヒオル、メルヒオル、僕はどんなに苦しい思ひをしてゐたか知れないんだぜ！

ヘンスヘン・リロフ

おめでたう、モリッツ。――つかまらなくつてまあよかつたね！

モリッツ

君にやわからないよ、ヘンスヘン、君にや想像もつかないよ、どんなに危險だつたかといふことは。この三週間といふもの僕は地獄の入口を通るやうにあの戸口の前をそつと通つたもんだ。ところが今日見ると、その戸口があいてるんだ。僕は思つたね、誰が百萬マルクくれると云つたつて――決して、おお決してもう後へは引かないぞと！　――僕は部屋の眞ん中に立つてゐた――僕は

帳簿をあけてゐた――めくつてゐた――探し出してゐた――　――さうしてその間ぢう……思ひ出してもぞつとするよ――

メルヒオル

……その間ぢう？

モリッツ

その間ぢう戸口はあけつぱなしになつてゐたんだよ。――僕はどうして出て來たのか……どうして階段を下りて來たのか、自分でもわからない。

ヘンスヘン・リロフ

――エルンシュト・レーベルも上つてたかい？

モリッツ

たしかに、ヘンスヘン、たしかに！　――エルンシュト・レーベルも同じやうに上つてたよ。

ロベルト　それぢや君は讀み違へをしてるぜ。驢馬（エーゼル）の腰掛（スパンク）（劣等席）は勘定に入れないでも、君とレーベルを加へたら六十一人になるよ。それに上の教室は六十人きりはひれないもの。

モリッツ　僕は間違ひなしに讀んだんだよ。エルンシュト・レーベルは僕と同じやうに上つてゐた――どつちも併し當分の内假及第となつてるんだ。一學期の内に、どつちかが席を譲らねばならないんだ。――氣の毒なレーベル！　――大丈夫僕の方はもう心配はない。今度といふ今度僕はしみじみ思ひ知つたよ。

オットー　僕は五マルク賭けてもいい、君の方が譲ることになるさ。

モリッツ

なんだい持つてもゐないくせに。君の金なんぞ取りたくはないよ。――見てゐろ、今日からうんと勉強するんだ！　――今だから云ふが――君たちは信じようと信じまいと――そんなことはどうだつていい――僕は――僕は、自分で間違ひつこないことをよく知つてるから云ふが、若し上れなかつたら、僕はピストルで自殺するつもりだつたんだ。

ロベルト　ほらふき！

ゲオルク　臆病者！

オットー　自殺のお手並を拜見したいね！

レンメルマイエル

耳たぶを打ん殴つてやれ！

メルヒオル

（レンメルマイエルの耳を平手で打つ。）

――――さあ行かう、モリッッ。森の番小屋へ行かう！

ゲオルク

君あんな出鱈目を信じるかい？

メルヒオル

餘計なお世話だよ。――――奴等は奴等で勝手なことを云はして置くさ、ねえモリッッ！　さあ行かう、町はづれまで！

（教授（プロフェッソル）フンゲルグルトとクノッヘンブルフが通りかかる。）

クノッヘンブルフ

どうも不思議なことで、ねえ君、我輩の教へてゐる一番良い生徒がどうして

一番惡い生徒に引き付けられてしまつたのだらう、全くわからないですな。

フンゲルグルト

我輩にもわからないですな。

第五場

日の照つてゐる午後。――メルヒオルとヴェンドラが森の中で出逢ふ。

メルヒオル

君だつたのか、ヴェンドラ？　――斯んな所まで上つて來てひとりで何をし

てるの？　――僕はもう三時間も此の森の中を歩きまはつてゐたけれども、誰にも出逢はなかつたのに、いきなり君があんな茂みの中から飛び出して來たんだもの！

ヴェンドラ

ええ、私よ。

メルヒオル

君がヴェンドラ・ベルクマンでなかつたら、僕はドリアデが枝から落つこちたのかと思つたかも知れないよ。

ヴェンドラ

いいえ、いいえ、私ヴェンドラ・ベルクマンよ。――あなたは何處からいらして？

メルヒオル

僕は考へごとをして歩いてゐるのさ。

ヴェンドラ

私はくるまば草を捜してゐるのよ。母様が五月酒*をこさへるの。初めは母様も一所に來ることになつてゐたのだけれど、その時になつて叔母バウエルが來たでせう。さうして叔母バウエルは山が嫌ひでせう。――だから私ひとりで來たの。

メルヒオル

君くるまば草は見つかつて？

ヴェンドラ

籠一ぱいよ。あそこの山毛欅の木の下へ行くとうまごやしみたいに茂つてるわ。――今出道を捜してるところなの。私道がわからなくなつたのよ。もう幾時でせう、敎へてくださらない？

メルヒオル　丁度三時半を廻つたところだ。——幾時までに歸ればいいの？

ヴェンドラ　もつと遲いかと思つたわ。私長いこと川緣の芝に寢てつて、夢を見てゐたのよ。時間が早くたつてしまつて、もう夕方かと思つた。

メルヒオル　まだ歸らなくてよかつたら、もう少し此處いらに休んでゐようぢやないか。あそこの樫の木の下に僕の大好きな所があるんだ。頭を幹にもたせかけて枝の間から天を見つめてゐると、眠たくなつて來るよ。おや、地びたがまだ朝日のほとぼりで暖かいや。——僕ね、もう幾週間も前から君に聞きたいと思つてたことがあるんだよ、ヴェンドラ。

ヴェンドラ

でも五時までに私歸らなけりやならないのよ。

メルヒオル　それまでには一所に歸るよ。僕が籠を持つて上げるから、藪を拔けて歸つたら、十分で橋の所まで行けるさ！　——斯んな風に寢ころんで額に手をあてゝゐると、實に不思議な考が湧いて來るよ。……

（二人とも樫の木の下に寢ころぶ。）

ヴェンドラ　聞きたいことつて何、メルヒオル？

メルヒオル　僕はねえ、ヴェンドラ、君がよく貧乏人たちの所へ行くといふことを聞いたのさ。食物を持つて行つたり、着物や金を持つて行つたりするつて。君は自分からそんなことをするの、それともお母さんに云ひつかつて行くの？

ヴェンドラ

大概はお母様に云ひつかつて行くの。その日ぐらしの人たちばかしで、子供がたくさんあるわ。時時御亭主さんが職に離れると、飢ゑたり凍えたりするのよ。私たちの所にはもういらなくなつた物がたくさん戸棚や箪笥の中にしまひ込んであるんですものね。——でも何だつてそんなこと聞くの？

メルヒオル

君お母さんに云ひつかつてそんな所へ行くのが好きなの、それとも厭なの？

ヴェンドラ

もちろん大好きだわ！　——わかつてるぢやありませんか！

メルヒオル

でも子供は汚ないし、かみさんは病氣だし、家はごみだらけだし、亭主は君を憎んでるだらう、だつて君は働かないんだもの……

ヴェンドラ

そんなことなくてよ、メルヒオル。若しかさうだとしたら、私尙ほと進んで行くわ！

メルヒオル

何だつて尙ほと進でんなんか云ふのさ、ヴェンドラ？

ヴェンドラ

私尙ほと進んで行つてやるわ。——あんな人たちを助けてやることが出來れば、どんなに樂しみだか知れないもの。

メルヒオル

ぢや君は自分の樂しみになるから貧乏人たちの所へ行くんだね？

ヴェンドラ

あんな人たちが貧乏だから行くのよ。

メルヒオル　でも自分の樂しみにならなかつたら行かないんだらう？

ヴェンドラ　だつて樂しみになるなら行かないではゐられないぢやないの？

メルヒオル　さうしてそのおかげで君は天國へも行けるんだからね！　――矢つ張し僕が一月前から氣になつてゐたことは本統だつたのだ！　――それぢやけちん坊が、汚ない病氣の子供たちの所へ行つたつて樂しみにならないからと云へば、それでも仕方はないわけだね？

ヴェンドラ　あなただつて行つて御覽なさい、どんなに樂しみだか知れやしないわ！

メルヒオル

それでおかげでけちん坊は地獄に落ちるんだからね！　――僕は論文を書いて、ヘル・牧師（パストル）カールバウハへ送つてやるんだ。あの人が事の起りだから。犧牲の歡びだなんてふざけた事を云つてやがる！　――返答が出來なかつたら、もう兒童教授（キンデルレーレ）（日曜學校）にも出てやらなけりや、堅信式*も受けてやらないんだ。

ヴェンドラ　お父樣やお母樣に心配をかけるもんぢやなくつてよ！　堅信式はお受けなさいね。頭を使ふわけぢやありませんしさ。あれで私たちのあのいやな白い着物や、あなた方の長いずぼんさへ着なくてよかつたら、もつと熱心になれたかも知れないのにね。

メルヒオル　犧牲なんてそんなものがあるもんか！　無我なんてそんなものがあるもんか！　――善人は心から喜んで居り、惡人は慄へ呻（うめ）いてゐる。――ヴェンドラ・

ベルクマン、君は鬢の毛を搖るがして笑つてるね、僕はそれを見ると追放人のやうに氣が重くなつてしまふ。――――君はさつきどんな夢を見たの、ヴェンドラ、川緣の芝に寢ころんで見たといふ夢は？

ヴェンドラ

――――くだらないの――ばかばかしいの――

メルヒオル

目をあいて見た夢なんだね?!

ヴェンドラ

それは斯んな夢なの。私があはれな、あはれな乞食の娘になつて朝の五時から往來へ追ひ出されて、あらしの中を一日、無慈悲な亂暴な人たちに物を貰つて歩かなけりやならないの。それから夜になつて、ひもじいのと寒いので震へながら內へ歸つて來て、お父樣の思つてたほどおあしが貰へなかつたので、私

ぶたれたの、――そりやひどくぶたれたの――

メルヒオル

ああ、わかつたよ、ヴェンドラ。きつと君がくだらない童話を讀んだからだよ。大丈夫、そんな野蠻な人がありはしないよ。

ヴェンドラ

あら、メルヒオル、さうぢやなくつてよ。――マルタ・ベッセルは毎晩毎晩ぶたれて、翌る日までも痕が殘つてるのよ。まあ、どんなに痛いでせう！　聞いただけでも煮えかへるやうに腹が立つて來るわ。私あの人が可哀さうでならないの。夜中に枕に俯伏しては泣くのよ。もう幾月もそのことばかし考へて、どうにかして助けて上げたいと思つてるの。――八日ぐらゐなら私代つて上げてもいいわ。

メルヒオル

お父さんをすぐ告訴してやるといいんだ。さうしたら子供を取り上げられてしまふから。

ヴェンドラ

私ね、メルヒオル、まだ一度もぶたれたことがないのよ——たつた一度だつて。まるきり考へられないわ、ぶたれるつて、どんなだか。その時の心持を經驗して見ようと思つて、自分で自分をぶつて見たことはあるんだけれど。——きつと恐ろしい氣持でせうね。

メルヒオル

僕はそんなことをされたからつて子供がよくなるとは思はない。

ヴェンドラ

どんなこと云されたからつて？

メルヒオル

ぶたれたからつてさ。

ヴェンドラ

——たとへば斯んな枝つきれかなんかで！——あら、へなへなでも強いわ。

メルヒオル

血が出るぜ！

ヴェンドラ

これで一度私をぶつて見たかないこと？

メルヒオル

誰を？

ヴェンドラ

私をよ。

メルヒオル

變なことを考へ出したもんだね、ヴェンドラ！

ヴェンドラ

だつて何が變なの？

メルヒオル

安心したまへ！　――僕はぶつたりしやしないよ。

ヴェンドラ

でも私がぶつてもいいと云つたら！

メルヒオル

ぶたないよ！

ヴェンドラ

ぢや、ぶつて下さいとお願ひしたら、メルヒオル？

メルヒオル

君どうかしてやしないか？

ヴェンドラ

だつて私まだ一度もぶたれて見たことがないんだもの！

メルヒオル

君がお願ひするといふのなら……！

ヴェンドラ

――お願ひしてよ――お願ひしてよ――

メルヒオル

お願ひの味を敎へてやらうか！　――（ヴェンドラを打つ。）

ヴェンドラ

あら――なんともないわ！

メルヒオル

そりやさうだらう――――着物の上からだもの……

ヴェンドラ

そいぢや足をぶつて頂戴！

メルヒオル

ヴェンドラ！――（前よりも強く打つ。）

ヴェンドラ

まるで撫ぜたやうだわ！――撫ぜたやうだわ！

メルヒオル

待つてろ、畜生、惡魔（サタン）を叩き出してやるから！

（彼は棒きれを投出して、兩拳でまたひどく打つ。彼女は恐ろしい叫び聲を出す。彼はそんなことには構はないで、大きな涙を流しながら、狂亂のやうに彼女を打つ。突然、彼は飛び上つて、兩手で顳顬（こめかみ）を押へて、心の底から泣き叫びながら、森の奥へ駆け込む。）

第二幕

第一場

メルヒオルの書齋の夜。窓があいてゐて、ランプが机の上にゐいてゐる。――メルヒオルとモリッツが寢臺に腰かけてゐる。

モリッツ

僕はやつと元氣づいて來た。それだけ幾らか興奮してもゐるやうだけど。――ギリシア語の時間には酔つぱらつたポリフェーム*みたいに眠つてゐたんだが、ツンゲンシュラークの親爺に耳をつねられなかつたのが不思議だ。今朝はもう

少しで遅れるところだつた。目がさめると一番に思ひついたのは𝑠の附く動詞のことだ。――畜生、くそ、いまいましい、朝飯の間も、歩きながらも、動詞の活用のことばかし考へてゐたら、目がかすんでしまつた。眠つたのは三時を打つと直ぐだつたに相違ない。書物はペンで汚點だらけになつた。マチルデに起されたら、ランプが煙つてゐた。窓の下の紫はしどいの茂みの中ではつぐみがおもしろさうに啼いてゐた。――それを聞くとまた何とも云へないほど淋しい氣持になつた。僕は襟をつけて、髪を撫ぜつけた。――――誰でも何か自分の性質を押へつけた事をすると苦しいね！

メルヒオル　チガレッテを一本捲かうかい？

モリッツ　ありがたう、いや、僕はやりたくない。――どうかしてこれで押し通せるといいんだがね！　僕は眼球が飛び出すまで勉强して見るつもりだ。――エルンシュト・レーベルは休暇から以來もう六度もいけなかつたぜ。ギリシア語で三度、クノッヘンブルフの時間に二度、最後に文學史で一度。僕も五度目までではあぶなかつたが、今日からは大丈夫だ！　――レーベルは自殺しはしないよ。レーベルには犧牲になつてくれる親がないから、自分の心一つで、兵隊にでもカウボイにでも、水夫にでもなれる。僕がしくじつたら、お父さんは卒倒するだらうし、母樣は氣ちがひ病院に入るやうなことになるだらう。そんなことになつたら僕は生きてはゐられない！　――試驗前に僕は神に祈つて、あの苦い盞に口をつけないですむやうに、いつそ肺病にして下さいと賴んだ。盞は通り過ぎた。――けれども後光がまだ遠くから光つてゐるので、僕は晝も夜も上を向くことが出來ないのだ。――併しもう斯うして一度棒につかまつたが最後、何としてでも上がつてやる。若し落つこちたら、頸の骨を折るといふ避けられ

ない結果が保證してゐるから大丈夫だ。

メルヒオル

人生には思つたより下等な所がある。いつそ木の枝で首を縊つた方が氣が利いてたかも知れない。——母様はお茶をどうしたんだらう！

モリッツ

お茶でも飲んだらよくなるかも知れないね、メルヒオル！——僕は震へてゐるんだぜ。實に變な氣持だ。ちよつとさはつて見てくれ給へ。何を見ても——何を聞いても——何を感じても、いつもよりはつきりしてゐるのに、——そのくせ何もかも夢のやうだ——おお、何もかも感情に充ちてゐる。——あそこの月のあたつてゐる所には、花園が靜かに深く、たとへば永久の中までもつづいてゐるかのやうにひろがつてゐる。——茂みの間からはおぼろげな物が幾つとなく現はれ出て、息もつかぬせはしなさで、木のない所を横ぎつて、暗がりの方へ消えて行く。なんだか栗の木の下で會議でも開くんぢやないか知ら。——あそこへ下りて見ないか、メルヒオル？

メルヒオル

お茶を飲むまで待たうよ。

モリッツ

——木の葉がせはしなくささやいてる。——あれを聞くと、僕は亡くなつた祖母様に「首なし女王」の話を聞かされてゐた時のやうな氣持になる。昔、非常に美しい一人の女王があつた。その美しさは太陽のやうで、國中のどの娘よりも美しかつた。ただ氣の毒なことにその女王は首なしに生れついた。食べることも飲むことも出來なければ。見ることも笑ふことも接吻することも出來なかつた。宮中の政治向のことには、ただその小さい軟かい手だけで合圖をして示し、宣戰の布告とか死刑の判決とかには、その華奢な足で床を踏むのであつた。

ところが或日女王は一人の王に攻め落された。その王には偶然にも首が二つあつて、その二つの首が年中喧嘩ばかりして、口論の絶え間とてはなかつた。宮廷魔術師の長官がそこで二つの首の内の小さい方を取つて、それを女王の胴にすげた。するとどうだらう、その首がすつかり女王に似合つてしまつた。そこで王は女王と結婚して二人はもう喧嘩どころか、お互ひに額といはず頬といはず、口といはず接吻(キュッセン)して、長い長い間、幸福に樂しく暮らして行つた。……くだらない話さ！　でも休暇以來、僕には首のない女王のことが忘られないんだ。美しい女の子を見ると、なんだか皆んな首がないやうに思はれてならない。——すると今度は、突然僕自身が首のない女王になつたやうに思はれて來る。……若しかすると、僕はもう一度首のすげ替をして貰へるのぢやあるまいかといふやうな氣持もするよ。

（ガボル夫人が湯氣の立つてゐる茶を持つて來る。それを彼女は机の上にモリッツと

メルヒオルの前に置く。）

ガボル夫人　さ、皆さん、召し上れ。——今晩は、ヘル・シュチーフェル。いかがです？

モリッツ　ありがたう、夫人(フラウ)ガボル。——僕はあそこの下の輪舞(ライゲン)を見てるんです。

ガボル夫人　なんだかお顔色がよくございませんね。——どこかおわるいのぢやありませんか？

モリッツ　何でもないんです。少し夜更かしをしたんです。

メルヒオル　ねえ、昨夜徹夜して勉強したんですつて。

ガボル夫人

そんなことなすつちやいけませんよ、ヘル・シュチーフェル。身體のことは御自分でよく氣をおつけなさらないといけません。健康といふことをよくお考へなさいまし。學校も大事ですが健康には替へられませんからね。――新鮮な空氣の中を精出して散歩なさいまし！　その方があなたのお年頃では中世高ドイツ語を正しく使ふよりも大切なことでございますよ。

モリッツ

精出して散歩して見ませう。本統にさうです。散歩しながらだつて勉強は出來ますものね。どうして僕はそんなことに氣がつかなかつたのだらう！――書きものだけは、でも内でやらねばならないな。

メルヒオル

書きものは僕んとこでやりたまへ。さうすると二人とも樂だよ。――――

ねえ、知つてらつしやるでせう、母様、マックス・フォン・トレンクが神經熱にかかつてゐたことは！――ところが、今日おひる頃ヘンスヘン・リロフがトレンクの死の床から校長ゾンネンシュチッヒの所へ驅けつけて、トレンクが僕の見てゐる所で死にましたと知らせたんです。――「さうか？」ゾンネンシュチッヒが云ひました。「君は前週からまだ二時間留置がすんでゐないぢやないか？――此處に門衛へ持つて行く書付がある。さあ、爲すべきことをしなさい！學級は皆んなして埋葬に參列しませう。」――ヘンスヘンの奴開いた口が塞がらなかつたつけ。

ガボル夫人

あなたの讀んでゐるのは何の御本です、メルヒオル？

メルヒオル

「ファウスト。」

ガボル夫人
もう讀んでおしまひ？

メルヒオル
まだすみません。

モリッツ
僕等は丁度ヴァルプルギスの夜*まで行つたところです。

ガボル夫人
私ならもう一二年してから讀むことにしますね。

メルヒオル
だつて、母様、斯んなに美しい事の澤山書いてある本は外にないと思ひますよ。なぜ僕が讀んぢやいけないんでせう？

ガボル夫人

——あなたにはまだわからないから。

メルヒオル
僕はさうは思ひませんよ、母様。もちろん此の本の深遠な所はまだ十分僕につかめないのはよくわかつてゐます、けれども……

モリッツ
僕等はいつも二人して讀むんです。するとずつとよくわかるんですよ！

ガボル夫人
あなたはね、メルヒオル、もう自分の爲になる事と損になる事の見わけ位はつく年頃ですよ。何でも自分で正しいと思へるだけのことをしなさい。私が止めねばならぬやうな事をしてくれなければ、私は誰にもましてそれを嬉しく思ひます。——私は、どんな良いものでも、まだそれを正しく受け入れるほどに成熟してゐない人にとつては、有害となることがあるのを、あなたに注意して

置きたかつたのです。――私はいいかげんな教育方針よりもあなたの方を信用してゐますよ。――――では皆さん、用事があつたら、メルヒオルや、あつちへ來て私を呼んでおくれ。私は寢室にゐますから。（去る。）

モリッツ

――――君の母様はグレーチヘンの事のことを云つたんだぜ。

メルヒオル

僕等はそんな所にはちよつときり拘泥しなかつたんだものね！

モリッツ

ファウスト自身ではもつと冷淡に片づけてしまつたかも知れないぜ！

メルヒオル

あの作品は併しそんな破廉恥な事を要點としてるんぢやないんだよ！――そりやファウストは女に結婚を約束したかも知れないさ、それから直ぐ女を捨てたかも知れないさ。でも僕から見ると、その爲に少しも責任が無くなつてはゐないと思ふ。グレーチヘンは併しさう云つたからと云つて矢つ張し失戀して死んでしまつただらうさ。――ところで誰でも殆んど痙攣的に目を据ゑて見てゐるのは何かといふと、全世界はP…V…*を中心にして動いてゐるといふことなのだ！

モリッツ

僕は率直に云はなけりやならないとすると、ねえ、メルヒオル、君の書いたものを讀んでからすつかりそんな氣持になつてしまつた。――休になつて間もなくあれが僕の足もとへ落ちた。僕はプレッツ*を手に持つてゐたのだ。――僕は戸を締め切つて、ちらちらする一行一行を大急ぎで讀んで行つた。たとへば驚いて目をさました梟が燃えてゐる森の中を飛び拔けて行くやうに。――なんだか大部分は目をつぶつて讀んでしまつたやうな氣がする。君の説明を讀ん

でゐると、おぼろげになつた思ひ出が僕の耳を打つた。たとへば昔子供の頃おもしろく歌つたことのある歌を、死ぬるいまはの際にふと誰かに聞かされて、思はずはつとしたやうな氣持だつた。——何よりも強く僕の同情を引いたのは、女のことについて書いてくれた所だつた。その印象はいつまでも消えることはないだらう。實際、メルヒオル、不正なことを堪へ忍ばなけりやならぬのは、不正なことをするより遙かに氣持がよいからね！　謂はれなくその氣持のよい不正な事を引き受けねばならぬのが、有らゆる地上の幸福の本質かと僕には思はれるのだ。

メルヒオル

——僕は自分の幸福を施し物を貰ふやうにして貰ひたくはない！

モリッツ

それはなぜなんだ？

メルヒオル

僕は何でも戰つて得られるものでなけりや何んにも欲しくないんだ！

モリッツ

それで享樂することが出來るだらうか、メルヒオル?!　——女の子は、僕等とは違つて、幸福な神神のやうな享樂をするんだ。女の子はその天性のおかげで、自分を抑へるやうに出來てゐる。一度に天國の現はれるのを見たい爲に、どんな苦いことにも最後の瞬間まで觸れないやうにしてゐる。花の咲いた天國が見えて來ても、まだ地獄を恐れてゐる。女の子の感情は岩から湧く泉のやうに新鮮だ。女の子はまだ地上の息氣のかからない一つの盃を持つてゐる。ネクタル*の杯を持つてゐる。その酒が燃え沸り出してから初めて飲み干すのである。……それに較べると、男がその時經驗する滿足などは他愛のない氣の抜けたものだ。

メルヒオル　君は君の好きなやうに考へてゐるさ。併しそれは君だけのことだよ。僕はそんなことを考へるのはいやだ。……

第二場

居間

ベルクマン夫人（帽子をかぶつて、外套（マンテル）をかけて、籠を腕にかけて、輝かしい顔付をして中央の戸口からはひつて來て）　ヴェンドラ！　――ヴェンドラ！

ヴェンドラ（下着とコルセットのままで右手の戸口に現はれて）　なあに、お母様？

ベルクマン夫人　もう起きましたか？　――おや、感心だねえ！

ヴェンドラ　もう外へ出ていらしたの？

ベルクマン夫人　早く着物をお着なさい！　――これからすぐにイナの所へ行つて頂戴。イナに此の籠を持つて行つて頂戴！

ヴェンドラ（次の話の間に着物を着終りながら）

イナの所へ行つていらしたの？　――イナどうなの？　――まだよくならないのか知ら？

ベルクマン夫人

ねえ、ヴェンドラや、昨夜鶴の鳥*が來てね、イナの所に小さい男の赤ちやんを置いて行つたんですよ。

ヴェンドラ

男の赤ちやんを？　――男の赤ちやんを！　――あらよかつたこと！　――だからあんなに長いことインフルエンツァだつたのね！

ベルクマン夫人

そりや見事な赤ちやんだよ！

ヴェンドラ

早く見たいわ、お母様！　――それぢや私これで三度目の叔母さんになつたのね――一人の女の子と、二人の男の子の叔母さんに！

ベルクマン夫人

どつちも何てまあ立派な男の子だらう！　――どうしても教會の屋根の近くに住まつてゐると斯うだからね！　――イナがモスリンの晴着を着て教會の石段を上つてから、まだ二年〔半〕*にきやならないのにね。

ヴェンドラ

鶴の鳥が赤ちやんをつれて來た時、お母様は其處にゐらして？

ベルクマン夫人

今飛び立つたばかしのところだつたよ。――薔薇は挿さないのかい？

ヴェンドラ

なぜもう少し早くいらつしやらなかつたの、お母様？

ベルクマン夫人

それから鶴の鳥はあなたにも序に何か持つて來た筈だよ――襟留（ブローセ）か何かを。

ヴェンドラ

本統につまらないわ！

ベルクマン夫人

でも全くの話が、鶴の鳥が襟留（ブローセ）を持つて來て上げたんだよ！

ヴェンドラ

襟留（ブローセ）なら私たくさん持つてて……

ベルクマン夫人

それぢや、尙ほと氣嫌よくおし。まだ何か用事があるの？

ヴェンドラ

私どうしても聞きたいことがあるの、鶴の鳥は窓からはひつて來たのだか、それとも煙突からはひつて來たのだか。

ベルクマン夫人

それならイナにお聞き。さうだ、イナに聞くといいよ！　イナなら委しく話してくれるだらうから。何しろ半時も鶴の鳥とお話をしてゐた筈だからね。

ヴェンドラ

ぢや行つたらイナに聞いて見てよ。

ベルクマン夫人

でも忘れないでおくれな！　私までもほんとうに聞きたくなつた、鶴の鳥は窓からはひつて來たんだか、煙突からはひつて來たんだか。

ヴェンドラ

それとも私煙突掃除屋に聞いて見ようか知ら？――煙突掃除屋なら、煙突からはひるのかどうか、誰よりもよく知つてる筈だわ。

ベルクマン夫人

煙突掃除屋なんかに聞くんぢやありませんよ、決して。煙突掃除屋に鶴の鳥のことがわかるものかね！　――どうせ口から出まかせの出鱈目を云ふにきまつてるから。……何だつて――何だつてそんなに往來の方ばかし見てゐるの??

ヴェンドラ

あんな人が、お母様――ほら、牛の三層倍も大きな人が！　――蒸汽船みたいな足をして……！

ベルクマン夫人

（窓の方へ駈けて行つて）

そんなことがあるものかね！　――そんなことが！　――

ヴェンドラ

（同時に）

寢臺を顎の下にあてて、ラインの守り*を彈いてるわ――　――ほら、あそこの角を廻つたわ……

ベルクマン夫人

いつまでたつてもお茶目さんねえ！　――年をとつたお人よしのお母様をそんなにからかふもんぢやありませんよ！　――さあ、帽子をおかぶんなさい。ほんとうにあきれてしまふ、いつになつたら物がわかるやうになるんだらう。――望みなんかありはしない。

ヴェンドラ

私だつてよ、母さん、私だつてよ。――どうして斯んなにわからないんだか、悲しくなつちまふわ。――私には結婚して二年半になるお姉様もあれば、自分でも三度目の叔母さんになつたのに、どうしてあんなことになるんだかまるきりわからないんだもの　……叱つちやいやよ、母さん、叱つちやいやよ！　だつて世界中に母さんより外に誰も聞く人はないんですもの！　ねえ、お母様、

云つて頂戴！　云つて頂戴な、母さん！　私だつて羞かしいわ。でも、後生だから、お母様、話してね！　斯んなことを聞いたつて、叱つちやいやよ。返事をして頂戴――どうしてあんなことになるの？　――どうしてあんなことになるの？　――お母様だつて、私が十四にもなつてまだ鶴の鳥の話を信じるやうなことを、まさか本氣で望んでゐらつしやりはしないでせう。

ベルクマン夫人

まあ！　この子はどうかしてるね、ほんとうに！　――とんでもないことを考へ出したものだ！　――そんなことはどうしたつて私には云へないよ！

ヴェンドラ

だつて、なぜ云へないんでせう、お母様！　――なぜ云へないんでせう！――皆んなが喜ぶことなんだもの、ちつとも見つともないことぢやないわ！

ベルクマン夫人

おお――どうしませう！　――私がわるかつた……さあ、早く支度をして行つてらつしやい！

ヴェンドラ

ぢや行つてよ、……その代り若しか煙突掃除屋の所へ聞きに行つたら？

ベルクマン夫人

私は氣ちがひになりさうだ！　――いらつしやい、此處へいらつしやい、話して上げるから！　何もかも話して上げるから……ああ、こまつてしまふ！――今日だけはいけないよ、ヴェンドラ！　――明日でも、明後日でも、來週でも……あなたの聞きたい時いつでも話して上げるからね……

ヴェンドラ

今日話して頂戴、お母様。今話して頂戴！　今直ぐ！　――お母様がそんなに困つてゐらつしやるのを見ると、私だつて尙と落ちついてゐられなくなるわ。

ベルクマン夫人

――私には話せないよ、ヴェンドラ。

ヴェンドラ

なぜ話して頂けないんでせう、母さん！　それぢや私かうして坐つてお母様の膝に俯伏してゐるから、お母様は前掛で私の頭を隠して、お部屋に獨りきりゐらつしやるつもりで話して下さればいいぢやないの。私身動きもしないわ。聲も立てないわ。どんなことがあつても我慢してるわ。

ベルクマン夫人

――ねえ、ヴェンドラや、私の咎ぢやありませんよ！　おわかりだらうね！――ぢや、いいかね！　――どうしてあなたが生れたか、それを話して上げますよ。――よく聞いてゐらつしやい、ヴェンドラや……

ヴェンドラ

（前掛の下で）

聞いててよ。

ベルクマン夫人

（夢中になつて）

――でも矢つ張りだめ！　――私にはそんな責任は負はれない。――私は牢屋にはひらなけりやならない――子供を取り上げられてしまはねばならぬ……

ヴェンドラ

（前掛の下で）

思ひ切つて話してよ、お母様！

ベルクマン夫人

ぢやお聞きよ……！

ヴェンドラ

（前掛の下で、震へながら）

おう！　おう！

ベルクマン夫人

子供を産むのにはね――私の話すことがおわかりかい、ヴェンドラ？

ヴェンドラ

早くよ、お母様――私我慢できないわ。

ベルクマン夫人

――子供を産むのにはね――男をね――自分が結婚した男をね……愛しなけりやならないの――愛しなけりやならないのよ――愛されるだけ愛しなけりやならないのよ！　有りつたけの心で愛しなけりやならないの。さあ――さあ何と云つたらいいだらう！　あなたの年頃ではまだ愛することが出來ないやうな愛し方で愛しなけりやならない……それでおわかりだらう。

ヴェンドラ

（立ち上つて）

ああ――こはかつたこと！

ベルクマン夫人

これから先どんな試みが來るかも知れないのですよ！

ヴェンドラ

――それつきり？

ベルクマン夫人

ええさうですとも！　――――早く籠を持つてイナの所へ行つてらつしやい。ショコラーデとそれからお菓子が出ますよ。――ちよいと、もう一遍見せておくれ――編み上げ靴と、絹の手袋と、水兵服と、頭の薔薇と……それに此の袴も段段短かくなつて來たね、ヴェンドラや！

ヴェンドラ

もうおひるの肉はあつらへて、母さん？

ベルクマン夫人

ようく氣をつけて行つていらつしやい！　――その内もう一寸ばかり裾飾を附け足して上げようね。

第三場

ヘンスヘン・リロフ

（手に灯を持ち、戸を後に立て切つて、小箱の蓋を取る。）

今宵祈はすましたか、デスデモナ？*

（パルマ・ヴェッキオのヴェーヌス*の複製を胸から取りはづす。）

――お前は我れ等の父*でも唱へさうな顔付はしてゐないね、可愛い人――物思ひに沈んで、誰でも來る者を待つてゐるやうだぜ。お前がヨナタン・シュレジンゲルの店の陳列窓の中に置かれてゐた時のやうに、幸福の芽ぐみ始めた甘美の瞬間にでも浸つてゐるかのやうだ。――今もさすがに、此のしなやかな手足は、此のなよやかな腰の圓みは、此の若々しく張つた胸は、まだ人を引きつける。――おお、あの大藝術家が十四歳のモデルを自分の長椅子の上に横たへて目のあたり見た時には、どんなに幸福に醉つたことだらう！

お前はたまには夢の中で僕の所へやつて來てくれないか？　――僕は兩手を擴げて、お前を迎へ入れて、お前が呼吸の出來ないほどに接吻（キユツセン）して上げるよ。お前が僕の所にゐると、たとへば世繼の王女が荒れ果てた城に歸つて來たやうなものだ。門も扉も目に見えぬ手で獨りでに開くと、下の庭では忽ち噴水が樂

しさうに噴き始める……

わけは斯うだ！　――わけは斯うだ！＊――何も浮いた心からお前を殺すのでないことは、僕の此の胸の恐ろしい動悸を見てもわかるだらう。僕の咽喉（のど）は寂しい夜のことを思ふと締めつけられるやうだ。此の心にかけてお前に誓ふが、僕は決していやになつたのではない。お前がいやになつたなどと大それたことを云へる者があるだらうか！

だが、お前は僕の骨の髄までも吸ひ取る。僕の脊骨を曲げてしまふ。僕の若若しい目から最後の輝きまでも奪つてしまふ。――お前は思ひやりのない愼ましさで恐ろしく人に氣を揉ませたり、動かない手足でひどく人を疲らしたりする！　――お前が勝つか、僕が勝つかだ！　――さうして到頭僕の勝になつたのだ。

僕は今皆んなの名前を數へ立てて見ようか――僕が此處で同じやうな戰をして打ち負かした亡者たちの皆んなの名前を！　――第一がツーマンのブシヘ＊――これは今でも、僕の子供の時の樂園（パラディス）の鈴蛇＊とも云ふべき痩ぎすのマドマゼル・アンゼリクの一つの形見だ。次はコレジオのイオ＊、ロッソフのガラテア＊、それからブゲローのアモル＊に、J・ヴァン・ベールスのアダ＊――此のアダは僕の閨房（ベレム）に入れてやらうと思つて、父樣（パパ）の目をかすめて、內の執事の祕密の抽斗から持ち出したのだ。それからマカルトのおびえわなないてゐるレダ＊、これは僕が兄の大學の筆記帳（ノテ）の間から偶然に見つけ出したのだ。――これで六人までも、ねえ、花のやうな死の候補者よ、旣にお前の道しるべをしてタルタルス（夜見の國）の小路を辿つて行つたのだ！　それをせめてもの心やりにして、どうかそんな哀れつぽい目つきをして僕の苦しみを此の上大きく搔き立てないでくれたまへ。

お前はお前の咎で死ぬのぢやなくて、僕の咎で死ぬのだ！　――僕は自分に

對する正當防衛から斷腸の思ひをして七人目の妻殺しをやるんだ。青髯王*の役には悲劇的なところがある。僕の考では、殺された女たちを一所にしても、彼が一人づつ絞める時ほどの苦しみはしなかつただらうと思ふ。

だがお前のやうな惡魔が僕の寶石箱の紅絹の内にもう居なくなれば、僕は氣も落ちついて來れば、身體も丈夫になつて來るだらう。さうしたらお前の代りには、ボーデンハウゼンのルルライ*か、リンゲル*の捨てられた女か、デフレッゲルのロニ*かを後釜に据ゑてやらう——若しこれで早く良くなつたらば！

おそらくもう三箇月もぐづぐづしてゐたら、お前のむきだしのヨシャパテの谷*に僕のあはれな頭は熔かされて、日に熔けたバタのやうになつてしまつただらう。食卓と寢臺の分離（夫婦わかれ）をするには、いい時だつた。

ぶるるる、僕はヘリオガバルス*になつたやうな氣持がする！ Moritura me salutat！（死ぬる女がおれに挨拶する！）*——女よ、女よ、なぜお前は膝をくつ

つけてゐるのだ？ ——なぜ今になつてそんなことをするのだ？ ——不可解の永劫に入そのが怖いのか?? ——ちよつとでよいから動いてくれ、さうしたらお前は宥してやるよ！ ——たつた一つでよいから、女らしい感情とか、色氣のあるこなしとか、思ひやりのそぶりとか、さういつたやうなものを見せてくれないか！ ——さうしたらお前を金縁の額に嵌めて、僕の寢臺の上に懸けてやるよ！ ——お前にはわからないのか、お前の操正しいのが僕を放蕩者にしてしまつたのだとは？ ——實に恨めしい情知らずだ！

……誰にも氣がつくやうに、きつと此の女は模範的の教育を受けたのだらう。——さう云へば僕だつてさうだ。

今宵祈はすましたか、デスデモナ？

胸がひきつつて來る—— ——何だ、くだらない！ ——聖アグネス*も内氣から死んだのだが、お前の半分も裸かではなかつた！ ——もう一つ接吻を上

げよう、お前の花のやうな身體に、——お前の子供らしく脹らんだ胸に、——
お前の軟らかな圓味のある——お前の情知らずの膝に……
わけは斯うだ、わけは斯うだ、わが心よ！
淸い星たちよ、お前たちには云はれない！*
わけは斯うだ！

（畫像は底へ落ちる。彼は蓋を閉ざす）

第四場

乾草棚——メルヒオルが新鮮な乾草の中に仰向に寢てゐる。
ヴェンドラが梯子を上つて來る。

ヴェンドラ　斯んな所へはひつてたの？　——皆んなして搜してゐるよ。車がまた出てるのよ。手傳つて頂戴。あらしがやつて來たのよ。

メルヒオル　來ちやいけない！　——來ちやいけない！

ヴェンドラ　どうしたの？　——なぜ顏を隱すの？

メルヒオル　行つて、行つて！　——行かないと土間へ投げ落すよ。

ヴェンドラ　そんなこと云へば尙と行かないわ。——（メルヒオルの傍に坐る）なぜ私と一所に

牧場へは行かないの、メルヒオル？　――此處は蒸暑くて暗いちやないの。づぶ濡れになつたつて外の方がましだわ！

メルヒオル

乾草の匂は實にいいね。――外の空は柩掛みたいに眞黑になつてるだらうね。僕にはなんにも見えない、君の胸に光つてる罌粟の花が見えるきりだ――それから君の心臓の音が聞こえる――

ヴェンドラ

――接吻しちやいけない、メルヒオル！　――接吻しちやいけない！

メルヒオル

――君の心臓の音が――聞こえる――

ヴェンドラ

――愛することになるのよ――接吻すると――――――――

けない、いけない！　――――

メルヒオル

實際、愛なんてものがありはしないよ！　――すべて利己だ、すべて自我主義だ！　――僕は別に君を愛してるんぢやないよ、君が僕を愛してるんでないと同じやうに。――

ヴェンドラ

――いけない！　――――――――――――いけないつてば、メルヒオル！　――――

メルヒオル

――――――ヴェンドラ！

ヴェンドラ

おお、メルヒオル！　――――――――――――いけないつてば

――――いけないつてば――――

第五場

ガボル夫人

（腰かけてゐる、書きながら、）

親愛なヘル・シュチーフェル！

私はあなたのお手紙に對して二十四時間考へた上にまた考へて、今重たい心で筆を取つてゐます。アメリカへ旅行する金をば――私は私の一番神聖な誓言を與へます――あなたに御用立することは出來ません。第一、私にはそれだけのお金が自由になりません。第二、假りに自由になるとしても、そのやうな重

大な無分別な事の實行をお助けするのは、此の上もない罪惡だと思はれます。ヘル・シュチーフェル、若しあなたが私の此のお斷りを愛の缺乏のしるしとお取りになつたら、それは大變な誤解でございます。反對に若し私があなたの一時の思ひ違ひに惑はされて、思慮を失つて、私の最初の一番接近してゐた感情を盲目的に追求するやうなことでもいたさうものなら、それこそ私はあなたの母らしいお友だちとしての義務をなほざりしたものでございませう。私は喜んで――あなたさへお望みならば――あなたの御兩親に手紙をさし上げてもよろしいと思つてゐます。私はあなたの御兩親に對して、あなたが此の學期中出來るだけのことをなさつた事と、あなたの力をそれが爲に使ひ果たされた事と、あなたの運命を今嚴酷に批判するのは、單に正當でないばかりでなく、却つて何よりも甚しくあなたの精神上肉體上の健康狀態に有害な結果を來たしはしないかといふ事を、說得しようと思つてゐるのです。

あなたが私に對して、若し高飛することが出來ない場合は自殺するつもりだと暗に威嚇するやうなことをなさつたのは、正直に云ひますと、ヘル・シュチーフェル、少し私には意外に思はれました。假りに不幸がどんなに不當なものであるとしても、それから遁れるために不純な手段を選んではなりません。私はこれまであなたに對していつも善意をのみ示して來ましたのに、あなたの方では私に對して或は恐ろしい計畫の責任を負はせようとするのではないかと思はれるやうななされ方は、ひがんだ考へ方をする人の目から見ると、强迫とも見えるやうな所がありはしないかと存じます。私は白狀します、あなたはもちろん人は自分で責任を負はねばならぬことはよくおわかりだと思ひますが、此度のあなたの態度は私には殆ど豫期してゐなかつたことでございます。併しながらまた私は、あなたが初めての驚に打たれて御自分の行爲を完全に認知することが出來なくなつてゐらつしやるのではないかと、堅くさう信じて居ります。

だから私は此の手紙が屆く頃にはあなたはもう氣も心も晴れやかになつてゐられるやうに望みます。何事もあるがままに受け入れなさいませ。私の考では若い人を學校の證明書で判斷するのは全くよくない事だと思ひます。非常に成績の惡い生徒がえらい人になつたり、また反對に優秀な生徒が世間に出て、それほどでないといふ實例は幾らもあります。必ず私は保證しますが、あなたの此の度の不運は少くとも私と交渉のある範圍では、あなたとメルヒォルの交際に於て、少しの變動をも來たすやうなことはありません。私の息子が或る若い人、その人は、世間は何と批判してもかまひません、私の最も十分なる同情を得ることの出來てゐる人です、その人と交際してゐるのを見ることは、私にとつて喜を齎します。

だから、失望しないでゐらつしやい、ヘル・シュチーフェル！　——此の位の災難は誰にでもやつて來ます。さうしてそれに打ち勝たねばなりません。若し

皆んながその度に短刀や劇薬を手にしようものなら、世界には直に人間がなくなつてしまふかも知れません。近い内またお便りを下さい。さうして心から私の變らぬ挨拶を受けて下さい。

母らしき友

ファンニ・グ

第六場

ヴェンドラ

朝の日ざしの中のベルクマン家の花園。

なぜあなたはお部屋から脱け出して來たの？　——菫を探しに！　——だつて私を見てはお母様が笑つてるんだもの。——なぜあなたはもう唇を結んではゐらつしやらないの？　——わからないわ。——ほんとうに私わからないわ、何と云つていいかわからない……

道は毛氈のやうだ——石もなければ、刺もない。——足が地びたにさはらない……おお、昨夜はよく眠れたこと！

いつも、此處にあつたんだわ。——私の氣持は聖餐の時の尼さんみたいに眞面目になつてゐる。——可愛らしい菫さん！　——母さん、安心してゐらつしやいな。私あの懺悔服でも着るわ。——ああ、誰か頸にしがみついてお話の出來るやうな人が來てくれればいい！

第七場

夕闇。空には雲が淡くたなびいてゐる。道は低い灌木とこぬか草の中へ曲り込んでゐる。稍離れた所で川の音がきこえる。

モリッツ

さうだ、さうだ、それに限る。——此處はおれにはふさはない。皆んなで勝手にいぢめ合つてるがいい。——僕は戸を後に立て切つて、自由の世界に入つて行くのだ。——斯う矢鱈に追ひまくられてゐてはたまらない。

僕は此の世の中に無理に割り込んで來たんぢやない。だからいつまでも割り込んで行かなけりやならぬといふわけはないのだ！ ——僕は神樣と何んにも契約はしてゐない。世間ではそれをどんなにでもこじつけたい通りにこじつけるがいい。僕は人から押し出されたんだ。——と云つて親に責任を負はせるわけぢやない。でも親の方では、どんなことになつても引受けてくれるに相違ない。親は年をとつてゐるから、自分たちのしたことはよく知つてゐる筈だ。僕は此の世の中に來た時は、全くの赤ん坊だつた——でなかつたら、もう少しは氣の利いた者になつてゐる筈だもの。——外の者が皆んな先に來てゐたからと云つて、僕だけが償ひをしなけりやならぬといふ筈はない！

考へて見ると僕は馬鹿だつた……誰かが狂犬を贈つて來たら、僕はそいつに贈り返してやる。若し其奴がその狂犬を受取らないと云つたら、その時は僕だつて人間だ……

考へて見ると僕は馬鹿だつたなあ！

人間は全く偶然で生れるので、十分に考慮した上ならば生れて來る筈はない

——　——　——自殺にきまつてる！

——天氣だけは少くとも分別がありさうだ。一日降りさうだつたがまだ持ち

こたへてゐる。——珍らしい靜かさが自然を支配してゐる。はでなものもなけりや、そそるものもない。天も地も透明な蜘蛛の網のやうだ。その上すべての物がいかにも樂しさうに見える。此の光景には子守唄のやうな可憐なところがある——「ねむれ、よい子よ、ねむれ」*と、さう云つてフロイライン・シュナンヂュリアが歌つたつけ。でもあの女は何だつてあんなに見つともなく肱を張つたのだらう！——ツェチリアの祭日*に踊つたのが僕の最後の踊だつた。シュナンヂュリアはハイカラな奴とばかし踊りやがる。あの女の絹の衣裳は後も前も裁ち落してあつた。後は腰帶の所で、さうして前は氣がぼうつとなる邊までで。——下着は無論着てゐる筈はない……

——————————

——あれを思ふと引き留められるやうだ。——もちろん大部分は好奇心だが。

——何ともいへない特別の氣持に相違ない——たとへば急流にでも押し

流されてるやうな感じではあるまいか——僕は何んにもしないで歸つて行くなんて、人に云はれはしない。もう何もかも經驗したやうな振(ぶり)をしてやらう……人間に生れて、一番人間らしいことを知らないのは耻だから。

——あなたはエジプトから來て、金字塔(ピラミーデン)を御覽になりませんでしたか?!

僕はもう今日は泣かないつもりだ。僕の葬式のことも考へないつもりだ——

——メルヒオルは僕の棺に花環を懸けてくれるだらう。牧師(パストル)カールバウハは僕の兩親を慰めてくれるだらう。校長(レクトル)ゾンネンシュチッヒは先例を歷史から引くことだらう。——墓石はとても僕には貰ひ出せまい。僕は黑花崗の上に純白の大理石の壺を載せたのが欲しいんだがな——併し今にそれも欲しくはなくなるだらう。墓なんぞ生きてゐる者の爲で、死んだ者に用事はない。

いろんなことを考へてゐると、考へるだけでも、一年はかかりさうだ。僕はもう泣かないつもりだ。僕は過去を振り返つてもいやな思がしないから愉快だ。

どんなに度々美しい夜をメルヒオルと一所に過しただらう！　――川岸の柳の下で、森の番小屋で、五本の菩提樹の立つてゐる街道のはづれで、ルーネンブルクの平和な城趾の山の上で――　――いよいよ最期の時が來たら、僕は一生懸命で乳酪（クリーム）のことを考へてゐよう。乳酪は腹にたまらない。口一ぱいになつて氣持のよい後味が殘る……人間といふものをばもつともつと惡く僕は思つてゐた。ところが誰を見ても自分の最善を盡してゐないものはなかつた。僕はこれまでずゐぶん人の事を憐れんだが、それは皆自分の氣持からのことだつたのだ。

昔のエトルリアの青年は死ぬるいまはの氣息（いき）で兄弟たちのために未來の幸福を祈つたといふ。その如く僕は祭壇へ歩いて行くのだ。――僕は籤を引く時の祕密の恐怖を遺憾なく味つてゐる。さうして僕の引きあてた籤を悲んでゐる。――――人生は僕に冷たい肩を向けた。遠くの方で眞面目な友情のある目が

僕に目くばせしてるのが見える。首のない女王だ、首のない女王だ――同情が兩手を伸ばして僕を待つてゐる……あなた方の掟は子供向だ。僕には自由通行券があるんだ。殼（から）が沈むと靈の蝶々が飛び立つ。幻影にはもう煩はされない。――諸君、ごまかしをやることはよしたまへ！　霧は霽れた。生きることは趣味の問題だ。

イルゼ

（裂けた着物を着て、頭に格子縞のきれを捲きつけ、後からモリッツの肩をつかまへる。）

何をなくしたの？

モリッツ

イルゼ?!

イルゼ

何を捜してるの？

モリッツ

なんだつて人をおどかすんだ？

イルゼ

何を捜すのよ？　――何をなくしたのよ？

モリッツ

なんだつてそんなにひどく人をおどかすんだい？

イルゼ

私は町から來たの。――これから内へ歸る所なの。

モリッツ

僕は何をなくしたんだつたか、わからなくなつた。

イルゼ

そいちや捜したつてだめだわ。

モリッツ

Sakerment（ザカーメント）, Sakerment（ザカーメント）!!（うるさい、うるさい!!）

イルゼ

私もう四日も内へ歸らないのよ。

モリッツ

――猫みたいにこそこそ歩いてゐやがる！

イルゼ

舞踏靴を穿いてるんだもの。――お母さんに睨まれるわ！　――一所に私の内まで行きませう！

モリッツ

何處をうろうろしてつたんだい？

イルゼ

プリアピアよ！＊

モリッツ

プリアピア？

イルゼ

ノールの所、フェーレンドルフの所、バヂンスキの所、レンツの所、ランクの所、シュピューレルの所――皆んなの所を片つぱしから！　――りりりん、りりりん――お母さんが飛び出してよ！

モリッツ

皆んな君を描いたのか？

イルゼ

フェーレンドルフは私を柱行者＊にして描いた。私がコリント式の柱頭（カピテル）に立

つてるところよ。フェーレンドルフつてば、本統にあんないたづら好きはありやしない。此間私がチューブを一つ踏み潰したの。すると畫筆（ピンセル）を私の髪の毛になすりつけた。私は耳朶を打（ぶ）つてやつた。すると調色板（パレッテ）を私の頭に投げつけた。私は畫架（シュタフェライ）をひつくら返してやつた。すると肱棒（マルシュトック）を振り廻して、アトリエの中を隅から隅まで、長椅子を飛び越えたり、机を飛び越えたり、床几を飛び越えたりして私を追ひ廻した。ところが暖爐の後に素描（スキッツェ）が一枚あつた。――おとなしくするか、しなけりやこれを引き裂いてよ！　――奴さんたうとう降參しちやつて、それからまたいやにひどく――いやにひどく――接吻されちやつたわ。

モリッツ

君、町にゐる時は何處に泊るんだ？

イルゼ

昨日は私たちはノールの所にゐたの――一昨日はボヨケウィッチの所に――

日曜日はオイコノモープロスの所に。それから、バヂンスキの所ではゼクト(三鞭酒)を飲んだわ。ファラブレゲスはペスト患者を賣り飛ばしちやつた。アドラルは灰皿で飲むのよ。レンツが子供殺しを歌つたらば、アドラルがギタレを亂暴に彈いてこはしちやつた。私醉つぱらつて寢床に昇ぎ込まれたのよ。——

——あんた、まだ學校へ上つてるの、モリッツ?

モリッツ　否(ナイン)、否(ナイン)……此の學期きりでよすんだ。

イルゼ　それがいいわ。ああ、ほんとうに日が早くたつてよ、お金儲けしてると!——あんたまだ覺えてる、ほら皆んなして泥棒ごつこしたぢやないの?——ヴェンドラ・ベルクマンとあんたと私とそれから外の人たちと、よく日が暮れると飛び出しては私の所で搾り立ての山羊の乳を飲んだつけね?——ヴェンドラどうして?　大水の時に私逢つたきりだわ。——メルヒ・ガボルどうしてて?——相變らずむつかしさうな顔をしてるか知ら?——唱歌の時間に私よく向ひ合つたつけ。

モリッツ　いつも理窟を云つてるよ。

イルゼ　ヴェンドラが此の間私の内へ來て、お母さんに砂糖漬を置いて行つたさうよ。私その日はイシドル・ランダウエルの所へ坐りに行つてたの。私を聖母マリアにしてさ、子供のクリストを抱かせたりするの。あんな馬鹿つたらありやしない、いけすかない。ふん、へなちよこ野郎!——あんた二日醉してるの?

モリッツ　昨夜からよ!——皆んな河馬みたいに飲んぢやつた。内へよろよろ歸つて

行つたのはもう五時だつた。

イルゼ

あんたの顔にちやあんと書いてあるわ。——女の子も誰か來て？

モリッツ

アラベラさ、女給仕い、アンダルシア生れの！ ——酒場の親爺奴夜通し待つても外の奴をよこさないんだもの。

イルゼ

あんたの顔にちやあんと書いてあるわよ、モリッツ！ ——私は二日酔つてものは知らないね。此の前の謝肉祭（カルネヴァル）の時なんざ三日三晩寢床にもはひらねば着物も脱がなかつた。それカフェの假裝舞踏會（レヂユート）、おひるはベラヴィスタ、夕方はチングル・タングル（劇場）、夜はまた假裝舞踏會（レヂユート）つて。レナもゐたわ、肥（ふと）つちよのヴィオラも。——三日目の晩に私ハインリッヒにつかまつちやつた。

モリッツ

ハインリッヒが君を捜してつたのか？

イルゼ

私の腕に躓いたのよ。私が生氣もなく往來の雪の上に寢てつたもんだから。——それであの人の所へ行つちやつたの。十四日もあの人の内にゐたのよ——ほんとうにいやだつたわ！ ——朝はあの人のペルシア寢捲を着せられてさ、夜は黒いお小姓服を着せられて部屋の中を歩かされるのでせう。襟にも膝にも、袖口にも、白い飾を附けてさ。さうして毎日毎日姿勢を變へちや私の寫眞をとるのよ——ゾーファに凭つかからしてアリアドネ*にしたり、レダにしたり、ガニメド*にしたり、四つん這に這はして女のネプカデネザル*にしたりしてさ。さうかと思ふと、今度は首縊りだ、銃殺だ、自殺だ、石炭瓦斯だつて騒ぎ廻るんだもの。それから明け方になると、ピストルを寢床の中へ持ち込んで、玉を

一ぱいこめて、そいつを私の胸元にさしつけて、ちよつとでも動いて見ろ、打つ放すぞ！　――お私どうかすると打たれたかも知れなかつたのよ、モリッツ、打たれたかも知れなかつたのよ！　――それから今度はそいつを豆鐵砲みたいに口で銜へるの。さうすると自己保存の衝動が起つて來るんだとさ。それからまた今度は――ぶるるる――私よく脊骨を打ち拔かれなかつたと思ふわ。

モリッツ　ハインリッヒはまだ生きてるかい？

イルゼ　知るものですか！　――寢臺の上には大きな姿身が天井に嵌め込んであつた。部屋は塔みたいに高くて明るくて歌劇劇場のやうだつた。上を見ると自分の姿が天からぶら下つてゐる。氣味がわるくなつて毎晩夢ばかり見たわ。――神樣、おお神樣、早く夜が明けますやうに！　――おやすみ、イルゼ。お前は眠つて

る時に殺して見たくなるほど美しいね！

モリッツ　そのハインリッヒの奴まだ生きてるかい？

イルゼ　生きてゐられちやたまらないわ！　――或日アブサントを買ひに行つたひまに、私は其處にあつた外套を引つかけて往來へ飛び出した。謝肉祭はもうすんでゐたので、私はおまはりさんに捉まつちやつた。なぜお前は男の服裝をしてゐるか？　――それで警察へ引つ張られると、其處へノールと、フェーレンドルフと、バヂンスキと、シュピューレルと、オイコノモプロスと、ブリアピアの連中が皆んなやつて來て、私を保證してくれたの。辻馬車でアドラルのアトリエに運ばれて行つた。その時から私あの人たちとすつかり仲よしになつちやつたの。フェーレンドルフはお猿さんだし、ノールは豚、ボヨケウィッチはみ

みづく、ロイソンは鬣犬（ヒエーネ）、オイコノモプロスは駱駝よ——でも私、あんな人たちを皆んな同じやうに可愛がつて、外の人は誰もかまつてやらないんだ。世界中が大天使や大富豪（ミリオネーレ）ばかりになつても、かまつてやらないわ？

モリッツ

——僕は歸らなけりやならない、イルゼ。

イルゼ

一所に私の内まで行きませうよ！

モリッツ

——何しにさ？ ——何しにさ？ ——

イルゼ

搾り立ての山羊の乳を飲みませうよ！ ——あんたの髪に燒鏝をかけて上げるわ。さうしてあんたの頸に鈴を下げて上げてよ。——さうしておん馬も一つ

あるから、乘せて上げるわ。

モリッツ

僕は歸らなけりやならないんだ。——まだこれからザサニデ朝*と山上の說教*と、平行六面體を調べなくちやならないんだ。——さよなら、イルゼ！

イルゼ

おやすみ！ ……今でも皆んなヴィグワムへ行つて、ほら、メルヒ・ガボルが私と仲直りした所？ ——ぶるるる！ 今に皆んなの來るまで、掃き溜の中で待つてるわ。（急ぎ去る。）

モリッツ

（ひとりになつて）

——————もう一度呼んで見よう——（呼ぶ）——イルゼ！ ——イルゼ！ 仕合せともう聞こえない。

——僕はそんな氣持にはなれない。——それには自由な頭と快活な心がなくちや駄目だ。——殘念だが、殘念だが、機會を逃がした！

僕は斯う云つてやればよかつた。僕だつて寢臺の上には素破らしい姿見が懸けてあるぞ——僕だつて跳ねつ返りのじやじや馬一匹位なんでもありやしないぞ——僕だつてそいつに長い黑絹の靴下と黑の護謨皮の靴を穿かして、黑の長い山羊皮(グラセ)の手袋を嵌めさして、黑のびろうどを頸に捲かして、絨氈の上を先拂ひをさせて歩かせてやれるぞ——僕だつて氣ちがひじみた發作が起きれば其奴を枕で絞め殺す位……僕は情欲の話になると笑ひたくなる……僕は——

怒鳴つてやらう！——怒鳴つてやらう！——君になりたいよ、イルゼ！——プリアピア！——無感覺！——僕はそれで氣力がなくなつた！——あの幸福の子！　太陽の子——僕の嘆きの道に立つた歡樂の女の子！——

——おお！——おお！

——————————————

——————————————

（岸の茂みの中で）

いつとはなしにまた出て來た——芝生の土手に。王樣の蠟燭(雜草)が昨日からずつと伸びた。柳の間から見ると景色はいつも同じだ。——川は熔かした鉛のやうに重たく流れてゐる。僕は忘れてはならない……（ガボル夫人の手紙をかくしから取り出してそれを燃す。）——やあ、火の子が飛ぶこと——此處にも彼處にも、縱橫無盡だ。——人魂だ！　夜這ひ星だ！——

火を附けるまでは草も見えれば地平線の上の横雲も見えてゐたのに。——もう眞つ暗になつてしまつた。もう僕は内へは歸らないんだ。

第三幕

第一場

會議室。――壁にペスタロッチ*とジャン・ジャック・ルッソー*の肖像が懸かつてゐる。一つの綠色で蔽はれた卓の周りには、瓦斯の火の幾つも燃えてゐる下に、教授（プロフェッソーレン）アッフェンシュマルツ、クニュッペルヂック、フンゲルグルト、クノッヘンブルフ、ツンゲンシュラーク及びフリーゲントートが着席して居る。上座の一段高い肱掛椅子に校長（レクトル）ゾンネンシュチッヒが着席。門衛バベバルトは戸口に蹲んでゐる。

ゾンネンシュチッヒ

……何かお話しなさる方はありませんか？　――――では、諸君！　――今我我が宗教教育省に向つて我我の犯罪生徒放校の件を申告せざるを得ないとするならば、我我は最も嚴肅なる理由から、それをせざるを得ないのであります。我我がそれをせざるを得ないのは、既に生じたる不幸を償はんがためであります。我我が更にそれをせざるを得ないのは、將來此の種の打擊に對して我我の學校を安全ならしめんがためであります。我我がそれをせざるを得ないのは、我我の犯罪生徒が風紀紊亂の影響を同級生の上に及ぼしたる事に對して之を責めんがためであります。最後に我我がそれをせざるを得ないのは、彼をして同樣の影響を殘餘の同級生の上に及ぼさしめんことを防がんがためであります。我我がまた――之は諸君最も嚴肅なる理由と云ひ得るでせうが――更にそれをせざるを得ないのは、如何なる反對意見をも壓倒する理由からでありまして、卽ち、我我は自殺病の蔓延を我我の學校に對して豫防せねばならぬからで

あります。今や自殺病は既に幾多の高等普通學校（ギムナジエン）に傳染して、從來各生徒をその教育に依つて教養ある階級にまで教養してゐた所の生活條件に束縛しようとする有らゆる方法を今日まで嘲笑してゐるのでありますから。――――何かお話しなさる方はありませんか？

クニュッペルヂック

私はもはや確信を腹藏してゐられなくなつたから申しますが、もう彼れ是れ此の室の窓を一つ開けてよろしい時分ではあるまいかと思ひます。

ツンゲンシュラーク

此の室には地下の塋、塋窟に於けるが如き、往時のヴェッツラル高、高、高高、高等法院*の文、文書室に於けるが如き空、空、空氣が瀰漫してゐるです。

ゾンネンシュチッヒ

ハベバルト！

ハベバルト

御用にございますか！

ゾンネンシチッヒ

窓を一つ開けなさい！　幸ひに戸外には空氣が十分にあります。――何かお話しなさる方はありませんか？

フリーゲントート

私の同僚諸君が窓を一つ開けさせたいと云はれるなら、私としてはそれに對して何等の異議はありません。ただ願はくば、その開けらるべき窓が私の直ぐ後の窓でなからんことを切望します。

ゾンネンシュチッヒ

ハベバルト！

ハベバルト

御用にございますか！

ゾンネンシュチッヒ

あちらの窓を開けなさい！　――何かお話なさる方はありませんか？

フンゲルグルト

私としては敢て辯を好む次第ではございませんが、あちらの窓は秋季休業以來閉鎖してある事實を、御參考にまで申し上げます。

ゾンネンシュチッヒ

ハベバルト！

ハベバルト

御用にございますか！

ゾンネンシュチッヒ

あちらの窓はそのまま開けずに置きなさい！　――諸君、私は投票に問ふべ

き動議を必要と感じます。只今問題となり得べき窓が開けらるべきことに贊成の同僚諸君は、その席に起立を願ひます。（數へる）――一、二、三。――一、二、三。ハベバルト！

ハベバルト

御用にございますか！

ゾンネンシュチッヒ

その窓もそのまま開けずに置きなさい！　――私としては此の空氣はこれ以上希望すべき何等の餘地がないといふ意見を抱いて居ります。――――何かお話しなさる方はありませんか？　――――諸君！　――假に我我が我我の犯罪生徒放校の件を宗教教育省に申請するのを怠るやうなことがあるとするならば、その時は宗教教育省は既に生じたる此の不幸に對して我我に責任を問ふでありませう。今日まで自殺病に見舞はれたる幾多の高等普通學校の内で、自

殺病蔓延の比例が二割五分に達したものは、宗教教育省の爲に一時閉鎖を命ぜられました。此の最も戰慄すべき打擊に對して我我の學校を防禦することは、我我の學校の維持者として並びに保護者として我我の義務であります。同僚諸君、我我が我我の犯罪生徒の他の能力を緩和條件として、之れを看過することの出來ない地位に在るのは、深く苦痛とする所であります。我我の犯罪生徒を辯護するが如き寛大の態度は、此際思考される範圍内に於ける最も顯著なる方法に依つて危機に瀕したる我我の學校存在を却つて辯護せざる事となります。我我は犯罪を裁判するは卽ち我我自らの無罪を證明すべき必要止むを得ざる手段なることを見るのであります。――ハベバルト！

ハベバルト　御用にございますか！

ゾンネンシュチッヒ

あの生徒を連れて來なさい！

（ハベバルト去る）

ツンゲンシュラーク　若し此處に瀰、瀰滿せる空、空、空氣が、只今云はれた如く、これ以上希望さるべき殆んど或は何等の餘地なきものとするならば、私は動議を提出しなければならぬです。卽ち、夏、夏季休暇中、あちらの窓も亦宜しく閉、閉、閉、閉、閉、閉、閉、閉鎖すべしだ！

フリーゲントート　若し我我の愛する同僚ツンゲンシュラークが我我の室を十分に換氣法の行はれてゐないものと思ふならば、私は動議を提出しなければならぬ。卽ち、我我の愛する同僚ヘル・ツンゲンシュラークその人の前頭部に宜しく一個の通風器を裝置せしむべしである。

ツンゲンシュラーク

我、我、我慢してゐられない！　――無、無禮は我慢してゐられない！――我輩の五、五、五、五、五感は健全だ　……！

ゾンネンシュチッヒ

私は我我の同僚ヘル・フリーゲントート及びヘル・ツンゲンシュラークに多少體面を保つことを要求しなければなりません。我我の犯罪生徒は既に階段を上つたかと思はれます。

（ハベバルトが戸を開ける。とメルヒオルが、靑ざめてはゐるが落ちつき拂つて、列座の前へ出る。）

ゾンネンシュチッヒ

もつと此方へ來なさい！　――ヘル・レンチエル・シュチーフェルが息子の兇惡なる罪過について通知を受けた後、狂亂の如くなつて、能ふ限り其の忌むべ

き行爲の原因を追求しようといふ希望を以つて、その息子モリッツの遺留品を搜索したところが、その際偶然にも本件に關せざる或る場所に於て一個の書類を發見した。それは未だ我我をしてかの忌むべき行爲を了解せしめるに至らないとはいへども、併し之に依つてかの不正行爲者の道德的紊亂に對して、遺憾ながら十分の說明を供給するに足りるものである。それは卽ち如何なるものかと云ふに、〝Der Beichtspiegel〟と題して對話體に綴られ、實物大の挿畫を挿入し、最も恥づべき卑猥の文字を以つて充たされたる長さ二十頁の論說であつて、或る墮落せる遊蕩兒に醜猥なる講義を要求されたるが如く裝ひたるものである。

――

メルヒオル

私は……

ゾンネンシュチッヒ

君は默つてゐるんです！　――ヘル・レンチエル・シュチーフェルは、問題の書類を我我に渡し、我我はその狂亂の如くなつてゐられる父親に對して、如何なる犧牲を拂つても筆者を發見して上げると約束した後で、我我に提出された手蹟を、死亡せる兇暴者の同級生全部の手蹟と比較したところが、全教職員の滿場一致の意見に依り、並びに我我の敬愛する能筆を以つて聞こえたる同僚氏の特別の判斷に依つて、君の手蹟と最もよく酷似してゐることが證明されたのである。――

メルヒオル

私は……

ゾンネンシュチッヒ

君は默つてゐるんです！　――我我は既に各方面からしても侵し難き根據ある幾多の事實によつて手蹟の類似は承認されてゐるにも拘らず、更に進んで當

面の處分を暫く保留して置くのは、先づ初めに犯罪者に對して、彼をして道德に反戻して斯くの如く責任あらしめたる失行と、同時に、それより生じたる自殺煽動の行爲とに就いて、十分に聽取せんが爲である。――

メルヒオル

私は……

ゾンネンシュチッヒ

君は私がこれから順次に一項づつ提出する所の一定の質問を、單簡にして且つ明確なる「はい」或は「いいえ」なる言葉を以つて答へるのです。――ハベバルト！

ハベバルト

御用にございますか！

ゾンネンシュチッヒ

記錄書類！　――　――私は我我の文書主任なる同僚ヘル・フリーゲントートに對して、これから出來得る限り逐語的に記錄されるやうに期待します。――（メルヒオルに向つて）君は此の書類を知つてゐるか？

メルヒオル

はい。

ゾンネンシュチッヒ

君は此の中に何が書いてあるか知つてゐるか？

メルヒオル

はい。

ゾンネンシュチッヒ

此の書類は君の手蹟であるか？

メルヒオル

はい。

ゾンネンシュチッヒ

此の卑猥なる書類は君の編纂に成つたものか？

メルヒオル

はい。――併し失禮ですが、ヘル校長（レクトル）、その中に卑猥な點が一つでもあつたら指摘して下さい。

ゾンネンシュチッヒ

君は私が提出する所の一定の質問を、單簡にして且つ明確なる「はい」或は「いいえ」なる言葉を以つて答へるのです！

メルヒオル

私は先生方のどなたにでも甚だよく知られてゐる事實以上のことも以下のことも書きはいたしません！

ゾンネンシュチッヒ

耻知らず！

メルヒオル

失禮ですが、その中に道德に悖つた點が一つでもあつたら見せて下さい！

ゾンネンシュチッヒ

君は、私が君の道化役になりたがつてゐるとでも思ふのか?! ——ハベバルト……！

メルヒオル

私は……

ゾンネンシュチッヒ

君は君の全教職員會議の權威に對して毫も尊敬の念を持たない！ 恰かも君が道德律の羞耻の愼しみに對する人性に深く根ざした感情に向つて禮節を辨へ

ざると同じやうにだ！ ——ハベバルト！

ハベバルト

御用にございますか！

ゾンネンシュチッヒ

先づこれはランゲンシャイト（アグルチエーレンデヴオラビユーク）の膠着的世界語三時間速習*と云つたやうなものだね！

メルヒオル

私は……

ゾンネンシュチッヒ

私は我我の文書主任なる同僚ヘル・フリーゲントートに對して、調書を終了するやうに願ひます！

メルヒオル

私は……

ゾンネンシュチッヒ

君は默つてゐるんですー　――ハベバルト！

ハベバルト

御用にございますか！

ゾンネンシュチッヒ

あちらへ連れて下りなさい！

第二場

降りしきる雨の中の墓地。――掘り開かれた一つの墓穴の前に、牧師（パストル）カールバウハが片手に傘をさして立つてゐる。その右手にレンチエル・シュチーフェルとその友人チーゲンメルケル及び伯父（オンケル）プロプストが。左手には校長（レクトル）ゾンネンシュチッヒが教授（プロフエツツル）クノッヘンブルフと一所に。高等普通學校（ギムナジウム）の生徒は輪なりに列んでゐる。少し離れて、こはれかけた一つの墓石の前にマルタとイルゼが。

牧師（パストル）カールバウハ

……そは永遠の父が罪の子等に授けたまひたる惠みを拒む者は、精神的に死なねばなりませんから！　――また我れと自ら肉につきて神の榮光を斥け、惡に生き惡に仕ふる者は、肉體的に死なねばなりませんから！　――さりながら慈悲圓滿の主が彼の罪ゆゑに負はしめ給ひし十字架をおぞましくも擲つ者に

至りては、誠に誠に我れ汝等に告げん、彼は永劫に死なねばならぬのであります！　――（彼は一と杓ひの土を穴に投げ込んで）――さりながら、此のいばらの道を絶え間なくさまよひ歩く我等をして、全能の神を稱へて、彼の測り難き慈悲を感謝せしめ給へ。そは神は此の者に三重の死を與へ給ひしが如く、正しき者をば幸福と永遠の生へと導き給ふのでありませうから。――アメン。

レンチエル・シュチーフェル

（涙に聲をつまらせ、一と杓の土を穴に投げ込んで）

あの子は私の子供ぢやなかつた！　――あの子は私の子供ぢやなかつた！――あの子は小さい時から私の氣に入らなかつたのです！

校長（レクトル）ゾンネンシュチッヒ

（一と杓ひの土を穴に投げ込んで）

道德律に反する最も顯著なる違犯としての自殺は、また道德律に對する最も

顯著なる證明でもあります。何となれば、自殺者は道德律に宣告の手數を節約せしめ、且つ其の存在を確證するものでありますから。

教授（プロフェッソル）クノッヘンブルフ

（一と杓ひの土を穴へ投げ込んで）

懶惰だ――墮落だ――淫樂だ――襤褸だ――零落だ！

伯父（オンケル）プロブスト

（一と杓ひの土を穴へ投げ込んで）

私は、子供が親に對して斯んなにまで恥をかかせることがあらうとは、私のおふくろが云つたとしても信じられない！

友人チーゲンメルケル

（一と杓ひの土を穴へ投げ込んで）

而かも二十年間朝から晩まで子供のことより外何んにも考へてゐなかつた父

親に斯んなにまで恥をかかせるとは！

牧師（パストル）カールバウハ

（レンチエル・シュチーフェルの手を握つて）

我我が知つてゐる通り、神を愛する者にはすべての事が最善となります。哥林多（リント）前書、第十二章乃至第十五章*。――慰めなき母親のことをお考へなさい。さうして失はれたものを二倍の愛に依つて償つて上げなさい！

校長（レクトル）ゾンネンシュチッヒ

（レンチエル・シュチーフェルの手を握つて）

我我はどのみち彼を進級させることは出來なかつたでせう！

教授（プロフェッソル）クノッヘンブルフ

（レンチエル・シュチーフェルの手を握つて）

また假りに我我が進級させたとしても、來年の春はきつと落第するにきまつてゐたでせう！

伯父（オンケル）ブロプスト

（レンチエル・シュチーフェルの手を握つて）

今では何よりも君は自分のことを考へて見るべき義務があるね。君は家長なんだからな……

友人チーゲンメルケル

（レンチエル・シュチーフェルの手を握つて）

僕の云ふことを聞き給へ！――いやな天氣には腹綿がひつくら返へるからね！――さしあたりグロックの一本も飲まなくちや心臓瓣膜の故障は直りつこないよ！

レンチエル・シュチーフェル

（鼻をかみながら）

あの子は私の子供ぢやなかつた……あの子は私の子供ぢやなかつた……

（レンチエル・シュチーフェルは牧師（パストル）カールバウハ、校長（レクトル）ゾンネンシュチッヒ、教授（プロフェッソル）クノッヘンブルフ、伯父（オンケル）プロプスト及び友人チーゲンメルケルに導かれて退場する。——雨が小止になる。）

ヘンスヘン・リロフ

（一と杓ひの土を穴に投げ込んで）

平和に眠り給へ、おい、正直者！——僕の思ひ出のいけにへとなつて殺された永遠の花嫁たちによろしく云つてくれ、それから慈悲深い神様にもどうかよろしく——おい、お人よし！——君は天使みたいに罪のない奴だつたから今に墓の上に案山子（かがし）を立てて貰へるぞ……

ゲオルク

ピストルは出たかい？

ロベルト

ピストルなんかどうだつていいさ！

エルンシュト

君は見たのかい、ロベルト？

ロベルト

馬鹿野郎のでたらめ屋！——誰が見た者があるもんか？——誰が一體見られるかい?!

オットー

それが問題だよ！——屍骸にはきれが掛けてあつたんだよ。

ゲオルク

舌を出してたかい？

ロベルト

目だよ！——だからきれが掛けてあつたんだね。

オットー　いやだね！

ヘンスヘン・リロフ　君實際かい、首をくくつたてのは！

エルンシュト　でも皆んな首は無かつたつて云つてるぜ。

オット！　馬鹿な！　――出鱈目さ！

ロベルト　僕は實際證據を握つてるんだからね！　――これまで見た首くくりで、きれが掛けてなかつたのは一つもなかつたよ。

ゲオルク

もつと人間並な死に方はなかつたものかね！

ヘンスヘン・リロフ　なあに、首くくりつて氣のきいたもんだね！

オットー　僕は彼奴に五マルク貸があるんだ。僕と賭をしたんだ。彼奴は及第して見せると云つたんだ。

ヘンスヘン・リロフ　彼奴が斯うなつたのには、君は責任があるよ。君は法螺吹つて云つたぢやないか。

オットー　ばかを云へ、僕は毎晩徹夜で勉强しなけりやならないんだよ。モリッッだつてギリシア文學史をやつたら、首をくくらなくつてすんだかも知れないんだ！

エルンシュト　作文は出來たかい、オットー？

オットー　やつと序論だけ。

エルンシュト　僕には何を書いたらいいか、さつぱりわからない。

ゲオルク　君がなかつたかね、アッフェンシュマルッが構造を敎へた時に？

ヘンスヘン・リロフ　僕はデモクリット*から寄せ集めをやるんだ。

エルンシュト　僕は小マイエルに何かないか、見てみようと思ふんだ。

オットー　君はもう明日のヴェルギル（ヴァージル）*はやつたかい？　――――

（高等普通學校（ギムナジウム）の生徒たちは去る。――マルタとイルゼが墓の穴の傍へ來る。）

イルゼ　早く、早く！　――あそこへ墓掘が來てよ。

マルタ　待つてた方がよかないか知ら、イルゼ？

イルゼ　なぜ？　――私たちは摘み立てを持つて來たのよ。いつも摘み立てばかし持つて來て上げるわ！　――幾らでも咲いてるから。

マルタ

さうね、イルゼ！　――（彼女は常春藤（きづた）の花環を墓穴に投げ込む。イルゼは前掛をあけて、中に一ぱい入れてあつた新鮮なアネモネの花を棺の上に撒く。）

マルタ　あたし内の薔薇を掘つて來よう。ひどい目に逢ふわ、きつと！　――でも、此處に一ぱい咲くでせうね。

イルゼ　そしたら私通る度に水をやるわ。それから川端から忘れな草を摘んで來たり、内からいちはつの花を持つて來たりするわ。

マルタ　綺麗でせうね！　きつと綺麗でせう！

イルゼ　私ね橋を渡つてしまふと鐵砲の音がしたのよ。

マルタ　まあ！

イルゼ　さうしてすつかりわけもわかつてしまつたのよ、マルタ。

マルタ　モリッツにあなた何か聞いて？

イルゼ　平行六面體よ！　――誰にも云つちやいけないことよ。

マルタ　此の手にかけて。

イルゼ　――はら、これがピストル。

マルタ　だから見つからないんだわ！

イルゼ　私ね、朝通りがけにモリッツの手から直ぐ取つちやつたのよ。

マルタ　あたしに頂戴、イルゼ！　――ね、私に頂戴な！

イルゼ　いやよ、これは私が形見に取つて置くのよ。

マルタ　それから、イルゼ、首がなくなつてたつて本統？

イルゼ　きつと彈丸を水ごめにしたんだわ！　――王様の蠟燭がそこいらぢう一面血

だらけになつてた。腦味噌が柳の木に引つ懸かつたりして。

第三場

ガボル氏夫妻

ガボル夫人　……學校ではきつといけにへの羊*が必要だつたのですわ。方々でやかましく鳴らし立てられるので其の儘にして置かれなかつたのでせう。そこへ私の子供が丁度運惡くめぐり遭はしたのです。母親として、子供を處罰しようとする人たちの手傳ひが私に出來るものですか？　――どうしたつて出來ません！

ガボル氏

――私はお前の悧巧な教育法を十四年間默つて傍觀してゐた。それは私の意見とは一致しなかつた。私は以前から、子供はおもちやではない、子供は我我の最も神聖な眞面目さを要求し得べきものだといふ確信を持つてゐた。併し私は自分で自分に云つた、若し一方の精神及び優雅が他の一方の嚴格なる主張と代り得る場合にも、その嚴格なる主張の方を採るべきではあるまいかと。――――私はお前を責めるのではないよ、フアンニ。併し邪魔をしないでくれ、私は子供に對するお前と私の間違つたやりかたを訂正するのだから！

ガボル夫人

私は邪魔をいたします、溫かい血の一滴でも私に通つてゐる限りは！　感化院なぞに入れたらあの子供は駄目になつてしまひますわ。犯罪性のものならばそんな所ででも、良くなるかも知れません。それだつて當にはなりませんもの。

善良な子供でもそんな所に入れられれば、きつと犯罪者になつてしまひます。植物が空氣と日光を奪はれるといぢけてしまふと同じやうに。私はあの子に對して間違つたことをした覺えはありません。私は今日だつて、いつものやうに天に感謝して居ります、天が私の子供に正しい性格と高尚な考へ方を目ざますやうな方法を私に示して下さつたことに對して。私の子供は一體どんな恐ろしいことをしたのでせう？　私にはあの子に辯解をしてやらうと思ふやうな罪は一つも思ひつきません――それに、學校を出されたからと云つて、あの子の罪ではありませんもの！　よしんば罪だとしても、それで償ひはもうついた筈です。そりやあなたは私より何んでもよく御存じでせうし、私より何んでも理論的に正しく知つてゐらつしやるでせう。でも私は自分から求めて私の子供を死なせにやることは出來ません！

ガボル氏

それは我我と關係のないことだよ、ファンニ。――我我が我我の幸福と力競べするのは冒險だ。弱くて進めない者は、落伍するより仕方がない。また當然來るべき事が早く來たとしても、要するに意に介するには當らない。そんな事になつては大變だがね！　我我が理性を以つて手段を講じ得る限り、動搖してゐる者を安全にしてやることは我我の義務だ。――あの子が學校を出されたのが、あの子の罪ではない。假りに學校を出されなかつたとしても、あの子の罪でないことに於ては同じだ！　お前はあまりにのんきだ！　性格の根本的腐敗を論じてゐるのに、家常茶飯事の末に拘泥してゐる。女には斯んな事の判斷は出來ないものだ。メルヒオルが現に書いた樣なものを書く者があつたら、本質の中心から腐敗してゐると云はなければならぬ。病膏肓に入つたものである。少しでも健全な所のある者は、あんな眞似はしない。我我は聖人ではない。誰だつて眞直な道からそれることはあるだらう。併しあれの書いたものは明かに

旗幟を標榜してゐる。あれの書いたものは偶然の過失といつたやうなものではない。恐ろしいほどの明白さを以つて大膽な意志を示してゐる。粗野な自然心を示してゐる。不道德なるが故に不道德を好むと云ふ傾向を示してゐる。あれの書いたものは、我我法律家の語法を以つてすれば「道德的發狂」と稱する所の異常なる精神的腐敗を表明してゐる。――果してあれの狀態に幾分でも矯正の餘地があるかどうか、私には何とも云へない。若し我我が一箇の希望を持たんと欲するならば、また何よりも、當事者の親として、我我の潔白な良心を保たんとするならば、今は我我に取つて、大決心を以て、また有らゆる眞面目さを以つて、事を斷行すべき時機なのだ。――これ以上議論することは止めようではないか、ファンニ！　私にはあれがお前の天才的氣質に適合してゐるので、お前があれを神の如く思つてゐることも、よくわかつてゐる。併し、お前はもつと强くならぬといかんね！　今度こそはお前の子供のために、自分を忘れな

くてはいかんね！

ガボル夫人

ああ、どういつたらいいのでせう！　――そんな事を仰しやるなんて、男でなければ出來ないことですわ！　そんな死文字のために目を眩まされるなんて男でなければ出來ないことですわ！　そんなわかりきつた事がわからないなんて、男でなければ出來ないことですわ！　――私はメルヒオルが周圍の感化を受け易いといふことがわかつた其の日から、良心に訴へ熟慮を凝らして育てて來ました。でも偶然といふものはどうすることも出來ないではありませんか?!　そんなことを云へば明日にも屋根瓦があなたの頭に落ちて來るかも知れないぢやありませんか、さうして其處へ駈けつけたあなたのお友だちが――お友だちどころぢやない、あなたのお父樣が、傷の面倒を見て上げようと思つて、却つてあなたを踏みつけるかも知れないぢやありませんか！　――私は見す見す子

供を殺させはいたしません。それでこそ私は母親なのです――わからない話ですわ！　まるで信じられない話ですわ！　一體あの子が何を書いたのでせう！　あの子にそんなものが書けるといふのが、何よりあの子の無邪氣な事の、單純な事の、子供らしい潔白な事の證據ではございませんか！　――斯んな場合に道德的腐敗なんかを嗅ぎ出すのは、人間知識（メンセンケントニス）といふものを少しも豫知しない人ですわ――全く魂の無くなつてゐるお役人か、でなけりや、餘つ程狹量な人ですわ！　――あなたは何とでも仰しやるがいい。若しあなたがメルヒオルを感化院に入れれば、私たちは別れませう！　さうしたら私は世界中を尋ね廻つても、私の子供を破滅から救ひ出す方法を講じます。

ガボル氏

お前は節を屈しなくちやいかん――今日でなくとも、明日でもいい。不幸の始末を付けることは誰にだつてなま易（ぜ）さしいことぢやない。私はお前の力にな

つて上げるよ。若しお前の勇氣が挫けたら、私はどんな面倒も厭はずにお前の心を慰めて上げよう。私には未來が灰色に暗憺として見えるのだ——お前までが出て行つたりしたら、萬事おしまひだ。

ガボル夫人

私はもうあの子には逢へなくなります、もうあの子には逢へなくなります。あの子はそんな卑しむべき事に辛抱は出來ません。あの子は侮辱されてぢつとしてはゐません。あの子は束縛を破ります。恐ろしい實例があの子の前にあるのですもの！　——私はたとひまたあの子に逢へるとしても——ああ、あの春のやうな快活な心——あの明るい笑——何もかも——善と正の爲に勇ましく戰はうとするあの子供らしい決心——おお、あの朝の空、それを私は私の最善の寶のやうにしてあの子の中に快活に純粹に育てて來たのですもの……若し不正を糺さうとなさるなら、私を捉へて下さい！　私を捉へて下さい！　あなた

の思ふ存分に私をして下さい！　私が罪は負ひます。——ただあなたの恐ろしい手をあの子に下すことだけはよして下さい。

ガボル氏

あの子に罪はあるんだ！

ガボル夫人

あの子には罪はありません！

ガボル氏

あの子に罪はあるんだ！　——　——　——實は何とかしてお前の見境のない愛情をもう少し節約して貰ひたかつたのだ。——　——今朝がた一人の婦人が私の所へ來て、殆ど口もきけない程に興奮して、此の手紙を私に渡して行つた——十五歳になるその婦人の娘に宛てた手紙なのだがね。その手紙を單なる好奇心からその婦人が開封して見たんだ。娘は家にゐなかつたんださうだ。——

するとその手紙には、メルヒオルが十五になるその子供に對して、自分の爲した事が不安でたまらない、自分は君に對して罪を犯したのだ、云々、とあつて、それで當然如何なる責任でも負ふ、若し結果が感じられるとしても、決して心配しないでくれ、自分は今何とかしようと思つてゐる、放校になつて却つて都合がよい、濟んだことの間違は却つて君の幸福になるだらう——と云つたやうなことが書き立ててあつたのだ。

ガボル夫人　そんなことがあるものですか!!

ガボル氏　その手紙はこさへ物だ。これには策略があるんだ。あの子の放校が知れ渡つたので、それを利用しようとした者があるのだ。私はまだあの子とは話しては見ない——だが此の手を見なさい！　此の書體を見なさい！

ガボル夫人　まあ何といふ恥知らずないたづらでせう！

ガボル氏　私もそれを心配してるのだ！

ガボル夫人　いいえ、いいえ——そんなことは決してありません！

ガボル氏　そんなことがなけりやそれに越したことはない。——その婦人はおろおろして、どうしたらよからうと私に聞くんだ。私は十五の娘を乾草小屋に放(ほう)つて置いたりしてはいけませんねと云つてやつた。手紙は幸ひに私の所へ置いて行つた。——我々がメルヒオルをこれから外の高等(ギムナジウム)普通學校(ギムナジウム)へやつたところで、親の目が屆かなくなるから、三週間もたつと同じ過をやつてしまふ——また放校

だ――また何時とはなしに春のやうな喜ばしい心はそれに慣れてしまふ。さあ
ファンニ、何處へやつたものかな?!

ガボル夫人

――感化院がいいでせうよ――

ガボル氏

何處が……?

ガボル夫人

感化院がいいでせうよ!

ガボル氏

其處へ行くと、第一に家庭には在るべくして無いものがある。嚴格な規律、原則、及び道德的抑制。これは如何にしても服從しなければならぬ。――その上、感化院と云つてもお前の考へてゐるやうな恐ろしい所ぢやない。其處で

はクリスト教的思想感情の發達といふことに重きを置いてゐる。あの子も遂には興味の代りに善を求めるやうになり、また行爲に於ても自然心でなくて法律を問題とするやうになるであらう。――半時間ほど前兄の所から電報が來たが、それに依るとあの婦人の陳述は確實である。メルヒオルは兄に打ち明けて二百マルク借り出してイギリスへ高飛しようとしたんだ……

ガボル夫人

(顏を蔽うて)

どうしませう!

第四場

感化院。――廊下。――ヂートヘルム、ラインホルト、ルプレヒト、ヘルムート、ガストン及びメルヒオル。

ヂートヘルム　二十フェンニヒの*銀貨だよ！

ラインホルト　どうするのさ？

ヂートヘルム　此處へ置くよ。お前たちは周りに輪を造るんだ。あてた奴にやるんだ。

ルプレヒト　君もやらねえか、メルヒオル？

メルヒオル　いや、僕はたくさん。

ヘルムート　ヨゼフ*！

ガストン　あいつやれねえんだよ。行儀直しに來てやがるんだから。

メルヒオル（ひとりごとで）　離れてるのは悧巧でない。皆んなが僕を目に立ててゐる。仲間入をしてやらう――さうしなけりや、駄目になつてしまふ。――――斯んな所に押し込められてゐたら誰だつて自殺したくなる。――――やり損なつたら、それまでだ！　うまく行つたら、尙結構！　どつちにしても損はない。ルプレヒトを友だちにしてやらう、あいつは此處のことをよく知つてるから。――あいつにユ

ダの息子の嫁タマル※の章と、モアブ*の章と、ロトとその身内の者*の章と、王妃ワシテ*の章と、それからシュナミ人アビシャク*の章と、そんな話をして聞かしてやらう。——ルブレヒトがあの連中の内では一等お粗末な人相をしてる。

ルブレヒト　さあ取つたぞ！

ヘルムート　まだおれの番があるよ！

ガストン　明後日お出でだ！

ヘルムート　すぐだい！　——今だい！　——さ、どんなもんでえ……

皆　Summa——summa cum laude!!（甲上——甲上!!）*

ルブレヒト　（貨幣を取つて）ありがたう！

ヘルムート　よこせ、やい、野良犬！

ルブレヒト　なんでえ豚つころ！

ヘルムート　獄門野郎!!

ルブレヒト　（ヘルムートの顔を殴つて）

——ざまあ見やがれ！　（さう云つて駈ける。）

ヘルムート

（ルプレヒトを追つて）

野郎叩き殺すぞ！

他の者たち

（後から追つかけながら）

うッし、でか犬！　うッし！　うッし！　うッし！

メルヒオル

（ひとりで、窓の方を向いて）

——あそこに避雷針の針金が下つてゐる。——あれにハンカチフを捲きつけなくちやならぬ。——あの女のことを考へると血が頭へ上つて來る。それからモリッツのことを思ひ出すと足が動かなくなる。——　——　——僕は新聞社

へ行かう。私に百マルク月給を下さい。呼賣をやりませう！　——編輯をやりませう——何んでも書きませう——地方記事でも——倫理記事でも——精神物理記事でも……そんなに易々と干乾になつてたまるものか。公衆食堂だつて、カフェ・タンペランスだつてある。——此の家は高さが六十尺で、漆喰が剝げてゐる……あの女は僕を憎んでるだらう——あの女は僕を憎んでるだらう、僕が自由を奪つてやつたもんだから。これからどんなにしてやつたところで、暴行はどこまでも暴行だ。——せめて此の上の願ひは、月日のたつ内に段段と……もうあと八日すると新月だ。明日蝶つがひに油を塗つてやらう。土曜の晩までにどうにかして鍵は誰が持つてゐるか探つて置かねばならぬ。——日曜の晩の祈禱の時に癲癇の發作が起ることにするんだ——どうか外に病人が出來てくれなけりやいいが！　——何もかも、もう在つたことのやうに僕にはは
きりと見える。窓の縁は雑作もなく越せる——それから飛ぶんだ——それから